

『治承物語』復元考

はじめに

尾崎 勇

慈円が企画した『治承物語』は、異なった領域の人材が集まって創られたコラボレーションの結晶である。『治承物語』創出の空間は洛南の方角にそびえる西山であった。この西山に源信に師事した源算が長元年間（一〇二八～三七）に善峯寺を建立し、その北側に隣接する処（北尾）に往生院と称する庵室を設けて隠遁した。往生院の院主二世に観性が就き、三世院主は慈円である。西山に承元元年（二〇七）頃より五ヶ年間に亘って慈円は隠棲する。甥の良経が執政の「臣」在任中に頓死、翌年の承元元年四月には兄の兼実も薨去した。我が九条家の今後をはかんだからでもある。承元三年（二〇九）三月に良経の女の立子が入内するという九条家の慶事があった。その三ヶ月後に「此夢想甚以為「奇異」。已以冥顯共符合了。」との言辞を付して『慈鎮和尚夢想記』を西山で攔筆する。『夢想記』に於いて壇ノ浦の海戦で神器喪失にともない、「武者ノ世」の覇者になっていく武將が台頭する時運とはじめて断じる。それは隠棲中の日々のなかで善峯寺楼門に聳立している金剛力士像を拝していたからでもあった。この像は、鶴岡八幡宮大塔供養の導師を勤めた観性への報謝として頼朝が寄進したものであった。安置されている像と武威を輝かした頼朝とが渾然一体になり、仏法王法相依の理に則って神器の宝剣と武將とが代替したと慈円は悟入する。やがて王法と仏法を陵辱する平家一門と武力衝突する頼朝をめぐる『治承物語』を慈円は企画し創出させる。煩雑な仕来りに拘泥される廟堂とは異なる西山、天台座主閑歴の高僧に課せられている雑事に束縛されない西山、そこに慈円圏が組織される。承元四年（二二〇）頃より「遊び心」の横溢した内容に仕立てられていった。⁽¹⁾

聖徳太子の霊告どおりに建保六年（二二八）四月には立子から懐成親王（後の仲恭天皇）生誕、この符合を直視して『愚管抄』を叙述していく際に、この『治承物語』が取り込まれた。

『愚管抄』と『平家物語』との関連が粗上にしばしば載せられてきている。例えば、

歴史書『愚管抄』は（中略）その源平史表裏の要領を得た把握は、複雑怪奇な歴史事象の整理法として『平家物語』の構成に影響を与えたと思われる。逆に『愚管抄』が原『平家物語』を資料としていたとの異説もあるが証明され得ない。

と通行の古典文学辞典には両書の関係が解説されている。施線部の「異説」とは、赤松俊秀の説である。⁽²⁾ 赤松は『平家物語』諸本のうち延慶本が原本に最も近いといい、『平家物語』の原本である『治承物語』が『愚管抄』の依拠資料であるとした。⁽³⁾ 『平家物語』生成過程から赤松説を謬説とみなした武久堅は、『愚管抄』依拠に二つ段階を想定している。⁽⁴⁾

立子の生んだ親王が春宮になるのは誕生の一ヶ月後の建保六年（二二八）十一月、立子の弟である道家の子息の三寅（頼経）が將軍継嗣となつたのは承久元年（二二九）六月である。太子の霊告が符合してくる時運のもとで慈円は『愚管抄』別帖を企図して、その冒頭には、

八十四代二モ成二ケルナカニ、保元ノ乱イデキテノチノコトモ、マタ世継ガモノガタリト申モノモカキツギタル人ナシ。少々アリトカヤウケタマハレドモ、イマダエミ侍ラズ。ソレハミナタバヨキ事ヲノミシルサントテ侍レバ、保元以後ノコトハミナ乱世ニテ侍レバ、ワロキ事ニテノミアランズルヲハバカリテ、人モ申ヲカヌニヤトロロカニ覚テ、

（卷三——二二九ページ）

とあるので、史論の序の意義を担っている。同時代史を対象にした「世継物語」に『続世継』・『弥世継』があるものの、「ヨキ事ヲノミシル」すだけであると慈円は述懐している。仏法と王法との動揺から「武者ノ世」を対象としている「ヨキ事ヲノミシル」した「世継物語」を反転させる意図で創られた「いくさ物語」の『治承物語』を見据え、意匠をこらす。『新古今集』の歌人によって深められた技法の「本説」では、典拠を自己葉籠中

の物としていく。すなわち歌の修辭が史論に援用される。同時代の嘉応二年（二一九）の摂政の松殿基房の從者が平資盛の車を破壊した報復として同年十月に資盛の父である重盛が武士を招集して参内する基房を陵辱した事象を叙述して「コノフシギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテアリケルニコソ。」（巻五——二四七ページ）との寸言を象嵌する。嘉応二年を語りの現在時にした『今鏡』（『続世繼』を以下、通行の名称で使用する。）では、保元・平治の両乱の戦闘状況を臚化するとともに武將としての清盛を默殺・忌避する念と高倉天皇贊美の念との間で葛藤しており、『平家物語』の「殿下乗台」素材となった事件も作者の寂超は知りながら韜晦しつつ擱筆した。⁽⁵⁾ 歌人寂超のそのような心を同じ歌人である慈円は斟酌したところからの注記が、施線の寸言であつた。換言すれば、執政の「臣」の基房を陵辱した事象の実相を物語化した『治承物語』を対置しながら同時に重盛報復の実相をもとに道理を説論している。⁽⁶⁾ 慈円圈で『今鏡』を止揚して創出させた『治承物語』が『愚管抄』には取用されたのである。本稿の目的は『愚管抄』の文章から『治承物語』を復元することである。

（一）太子の「兵殺綿々」と「治承」の年号の意味

承元元年（二〇七）十一月三十日に慈円は四天王寺別当に慈円は就いている。翌年十一月に所勞により一旦、後述する以仁王の子で慈円の高弟にあたる真性（二一六七—二二〇）に四天王寺別当を委ねたが、建保元年（二二三）九月十二日にふたたび就任し、そして終生に亘つて四天王寺別当でありつづけた。当寺の縁起である『荒陵寺御手印縁起』は聖徳太子の遺言の体裁をとっており、物部守屋を討伐したことに関連して、

逆臣惡禽屢現。揺動人心。迷乱横挾凶情。掠取田地。滅破寺塔。是只守屋變現而已。吾與守屋。如影與響。寺塔滅亡。国家壞失矣。

との訓戒を太子は垂れている。太子関連の歌が見え出すのは、四天王寺別当再任前である西山隱棲時の承元三年

(二二〇九) 十月詠の「厭離欣求百首」からであつて、

法のあたを跡まではらふ寺にきて雨にもりやをみぬよしもかな

(二九六五)

逆臣が現れて堂塔が荒廃するのは守屋の変化の仕業であるといひ、仏敵の守屋に雨漏る屋をかけて、堂塔整備拡充の抱負を詠じた⁷⁾。その理由は『縁起』に、

若^三有興隆輩^一。官位福榮。自以相統。子孫世々常安常榮。悉殖^三勝因^一。吾入滅之後。或生^三國王后妃^一。造^三建数大寺塔於國々所々^一。造^三置数大佛菩薩像^一。書^三写数多經論疏義^一。施^三入数多資財寶物田園等^一。

堂塔などを「若シモ興隆スル輩^デ有ルナラバ」、官位榮達・子孫繁榮がもたらされるとの教えによつてゐる。執政の「臣」在任のまま甥の良経が頓死し、その翌年には兄の兼実も薨去してしまい、九条家の最長老になった慈円は家運の再興を請願した⁸⁾。『縁起』では寺塔が傷んでも修理しないならば「若修理物尽無其料。(中略)百姓擾乱兵殺綿々。」と太子は警告している。すなわち『縁起』のこの言説は特に留意する必要があるように思われる。『愚管抄』別帖の推古天皇の条に「守屋ガクビヲキリ、多ノ合戦ヲシテ人ヲコロシテ」(巻三——二九九四〇ページ)とし、別帖の冒頭で「保元ノ乱イデキテノチノコトモ、(中略)保元以後ノコトハミナ乱世ニテ侍レバ、ワロキ事ニテ」(巻三——二二九ページ)と批評するとともに、同時代の「武者ノ世」の及ばせて「マノアタリ内乱合戦」(巻四——二七ページ)と呼応しているからである。『縁起』の教えが慈円の念頭に置かれてゐるであろう。

慈円が隠棲中の承元三年(一一〇九)三月に故良経の女の立子が東宮の守成親王(後の順徳天皇)に入内した。この事象を後年、『愚管抄』の別帖で、

サテ故摂政ノムスメハイヨクミナシ子ニ成テ、ヨロツコトタガイテ、イカニト人モ思ヒタリケレドモ、サヤウニヲボシメシキザシテアリケル上ニ、春日大明神モ八幡大菩薩モカク、皇子誕生シテ世モ治マリ、又祖父ノ社稷ノミチ心ニイレタルサマハ、一定仏神モアハレニテラサセ給ヒケント、人皆思ヒタル方ノスエトヲル事モアルベケレバニヤ、承元三年三月十日、十八ニテ東宮ノ御息所ニマイラレニケリ。

(巻六——二九六ページ)

と叙述したのであった。施線部にあるとおり九条家の家運が不如意であつたとし、二重施線部に及ぶと皇祖神と社稷神の約諾によつて立子には懐成親王が生誕して世はふたたび興隆していく道が敷設されたと言言することになる。前論でふれたように立子入内を後鳥羽院に要請する底意のもとに「夢記」を草した七年後にあたり、入内したことで「夢記」の効用はあつたのである。立子入内を直視して三ヶ月経過したとき、「此夢想甚以為奇異」。已以冥顯共符合了。」との言辞を象嵌した『慈鎮和尚夢想記』起草する。ちなみに、その識語に「承元三年¹⁰六月。於¹¹西山草庵¹²。書¹³之了。」とあるから起草は西山であつた。建保元年（一二二二）九月に四天王寺別当にふたたび就き、『縁起』の教えに則つて堂塔整備等に精励するなかで建保四年（一二二五）正月に太子から靈告がくだつた。建保六年（一二二八）十月には立子と順徳天皇とのあいだに懐成親王（後の仲恭天皇）が生誕する。靈告符合の気配のもとで『愚管抄』を叙述していく。壇ノ浦海戦の事象をめぐつて「コノ宝劍ウセハテヌル事コソ（中略）武ノ方ヲバコノ御マモリニ、宗廟ノ神モノリテマモリマイラセラル、ナリ。ソレニ今ハ武士將軍世ヲヒシト取テ」（巻五——二六五ページ）と批評しているのは、『夢想記』に「宝劍没¹⁴海底¹⁵之後。任¹⁶其德於人將¹⁷一¹⁸歟。聖人在¹⁹世者。定開²⁰悟由來²¹。思慮²²興廢²³歟。」と合致するので、『愚管抄』の雛型が『夢想記』であつたと判断できる。⁽⁹⁾夢とその「符合」は慈円の行動原理になつた。現存『平家物語』諸本のいずれにもその後の展開を先取りする夢が配されているのは、中古よりの物語の定型を踏襲してはいようが、雅頼に仕える青侍が清盛から頼朝へ政権が移るとした屋代本の語る夢は、『夢想記』の方法に近似する。

『縁起』の「兵殺綿々」との言辞に則つて、絶え間なく続く戦いの末に「人將」頼朝の率いる源氏の軍勢が平家一門に勝利する『治承物語』を企画した慈円は、青侍の夢を物語展開の本筋に仕組んだと思われる。

書名の「治承」に着目してみよう。頼朝は以仁王の令旨をもとに挙兵してより、年号が治承五年（一一八一）七十四日に養和と改元され、養和二年（一一八二）五月二十七日に寿永に改元されたにもかかわらず、寿永二年（一一八三）五月頃まで「治承」を使用したのである。⁽¹⁰⁾同年十月十四日の宣旨で朝廷は莊園問題に関する決定を頼朝に委ねたことで、謀叛の賊との汚名をすすぐ。頼朝は「二個の独立した権力であることを明示する象徴」とし

て、法的には無効の以仁王の令旨によつて東国支配を合理化する必要が無くなった。^[1]『吾妻鏡』では令旨が「東海・東山・北陸三道諸国」の多くの源氏勢等の人々の宛てて複数部配布された。ところが、延慶本『平家物語』では、

……昔上宮太子、如ク三破三滅^{セシガ}於守屋ノ逆臣^ヲ一、誅^テ叛逆役之一類^ヲ一、治^ニ無何之四海^一也。(中略)者^ハ依^レ宣^ニ行^レ之^ヲ。

治承四年四月 日

伊豆守正五位下源朝臣

謹上 前右兵衛佐殿

(中略)

同五月八日、伊豆ノ北条へ下着テ、兵衛佐ニ宮ノ令旨ヲ献ル。兵衛佐、此令旨ヲ給テ、国々ノ源氏等ニ被^ニ施行^セ一。

令旨に『縁起』と同趣の言辞が載り、頼朝に宛てて差し出されたのであり、その令旨をもとに頼朝は「近国之源氏等、定奉^ニ参加^ニ一」^一。北陸道之勇士等^ハ、」に

……相^ニ待^テ上洛^ヲ一、可^レ被^ニ供^ニ奉^セ洛中^ニ一也。依^ニ親王御気色^ニ一、執達如^レ件。

治承四年五月 日

前右兵衛権佐源朝臣

に「執達」して、源氏勢を糾合していく。延慶本では頼朝は檄を飛ばす展開となっている。このようにみえてくると慈円の思念が『治承物語』の根源に据えられていた証憑になるだろう。それは頼朝が征夷大將軍になる藤九郎盛長の夢を布置して、その三年後の寿永二年(一一八三)十月に征夷大將軍の官宣旨が下つたと延慶本では語るからでもある。この物語の展開に対して、事実では周知のように將軍官宣旨は建久三年(一一九二)七月である。『夢想記』で宝剣喪失に代替して王法に参入する頼朝は「武者ノ世」の覇者になっていくと断じた。これを道理であると『愚管抄』で揚言する慈円は、すでに『治承物語』の構想の時点で將軍官宣旨を虚構したのである。^[2]さらに特記したいことがある。『愚管抄』では建久六年(一一九五)五月に上洛した頼朝の史実をもとに、「カヤウニ在京ノ間人ニホメラレテ、(中略)天王寺ナドへ参メグリ……」(巻六——二七七ページ)と五年はやく四天王寺参詣

を摘記している。すなわち最初の上洛時の建久元年十一月には四天王寺に参詣している資料がないからである。『吾妻鏡』建久六年五月二十日条には、頼朝は剣を太子の聖霊に奉納したとみえる。四天王寺には將軍家代々の霊牌を安置する御霊屋とも称される五智光院が造営される（『古今著聞集』二二四）。別当の慈円が、この事柄を弁えて史論に組み込んだのであった。物語の將軍官宣旨の時間操作と同一である。とすれば平家と争い勝利するまで頼朝が使用しつづけた私年号の「治承」が『治承物語』の書名の由来になつていよう。

(二) 災禍にみまわれた「治承」の日々

改元の本来的な理由は皇位継承に伴う新帝の「代始改元」であるものの、末代では天人相関の理による改元が多くなる。すなわち「災異改元」からも『治承物語』の書名の由来を窺わねばならない。『愚管抄』では、多田蔵人行綱の密告による平家討伐の陰謀の発覚から、西光斬首・成親の流刑から刑死・俊寛流罪を叙述した直後には、安元三年七月廿九日二讃岐院二崇徳院ト云名ヲバ宣下セラレケリ。カヤウノ事ドモ怨霊ヲオソレタリケリ。ヤガテ成勝寺御八講、頼長左府二贈正一位太政大臣ノヨシ宣下ナドアリケリ。サテ又コノ年京中大焼亡ニテ、ソノ火大極殿ニ飛付テヤケ焼ニケリ。コレニヨリテ改元、治承トアリケリ。入道カヤウノ事ドモ行ヒチラシテ、西光ガ白状ヲ持テ院へ（中略）コレヨリ院ニモ光能マデモ、「コハイカニト世ハナリヌルゾ」ト思ヒケル程二、……………

（巻五——二四六ページ）

この文章があつて、安元が「治承」へと改元された理由にふれている。慈円が二十二歳の安元二年（一一七六）四月より無動寺で千日入堂の最中であつたから、当時の政治動向を直接に目撃してはいない。が、兄の兼実は日録に改元の事情を克明に記す。『玉葉』安元三年七月二十七日条に、

一 讃岐院の院号、並びに宇治左府の贈官贈位の事、来月三日行はるべし。（中略）

偏に敬慮にあるべし。他人是非を申すべからざる事なり。

(中略)

一 改元、来月四日行はるべしと云々。

とあり、崇徳院・頼長の怨霊が猖獗したこともあつて同年の八月四日に改元されたのであった。改元の経緯とその時の詔書のこと『玉葉』同月五日の条にみえる。すなわち、

仁字、仁平、仁安、共に快からず近きに在り。治承、水作り多々如何の由これを申し上げらる。而るに重ねて仰せて云はく、今度大極殿の火災に依り、この改元あり、者れば水作りを以て用ひらるる、その謂はれ無きにあらざるか。(中略) 大極殿の火災、天変等に依り、改元の由、詔書を作らしむべし。

とあるので、「治承」と改元されたのもやはり「災異改元」であつたことが判然としよう。

すでにふれたように宇都宮入道蓮生の孫である源承が著わした『源承和歌口伝』に、

下巻目六奥云、

治承四年卯月五日、於西山草堂一書畢。同十八日、相具寂超上人一見二合集一付三假名一了。

と記載されている。『治承物語』を創るために慈円園が組織された西山の空間で、治承四年当時に崇徳院の遺児である元性が寂超と『古今集』を校合していた。その本文には、

前参議教長点本にひぢとかけるかたはらに朱にてる(上)とついたり、件本花藏院法印(崇徳院御子)元性御坊にさづけたてまつる、法印御房北院御室にまいらせられたり、奥書云、

宮法印御房北山院御所参上、古今下十巻読之、即聞食之、如上卷、所承伝事等、具以令申畢

安元二年四月十二日観蓮

とあつて、崇徳院の近臣の藤原教長(一一〇九?)は出家して観蓮と号し、配流された後、召還され、安元・治承には元性に『古今集』を進講したりするなど歌人として活躍し、年齢的にも同じであつたので後述する源頼政と親交を深めていった念仏聖であつた。¹³⁾ 安元大火が崇徳院の怨霊の仕業と吹聴した教長は、院の鎮魂への氣運を

煽った中心人物でもある。⁽¹⁾崇徳院の遺児である元性と『今鏡』作者の寂超と院の近臣であつた観蓮の文事から、清盛に崇徳院の怨霊が憑依して後白河院の幽閉を結果するとの意図を根底に潜めて王法そして仏法を陵辱する清盛の造形化が『治承物語』ではかられるのではあるまいか。

『千載集』には、慈円は建礼門院右京大夫の兄の尊円に、

比叡の山に堂衆学徒不和の事出で来りて、学徒皆散りける時、法印慈円、千日の山籠り満ちなんことも近く、⁽²⁾聖の跡を絶たむことを歎きて、かすかに山洞に止まりて侍りけるほどに、冬にもなりにければ、雪降りたりける朝、尊円法師の許に遣し侍ける

法印慈円

いとゞしく昔の跡や絶えなんと思ふも悲し今朝の白雪

(一一二二)

との所懐を披瀝した歌が載っており、後年には長門本『平家物語』巻五「学生堂衆合戦」に当該歌は撰取される。この歌は仏法の牙城である延暦寺が目に残るようになってしまったとの慈円の慨嘆であつた。荒廃を実感したので、施線の「聖の跡」には、貴族の子弟を優遇したり山門寺門の分裂・僧兵横行の因を作った師の良源の許を離れ、多武峰に隠遁した増賀が意識されていよう。『愚管抄』のなかに「増賀上人」(巻六——二九五ページ)とみえる。増賀の事蹟を「本説」(典拠)として「いとゞしく昔の跡……」と詠じたと思われる。慈円はしばしば兼実に隠遁を訴えていたのであつた。『玉葉』治承三年(一一七九)四月二日条に、

法性寺座主道快^(慈円)来らる。千日堂に入り了り、去る二十四日下京、今日始めて来らるるなり。条々示し合はせらるる事等あり。大略世間の事益無し。隠居の思ひある由なり。余制止を加へ了んぬ。

とあり、翌年の『玉葉』治承四年六月十日条に「法性寺座主^(慈円)来らる。数刻談話し、祈りの事等示し付き了んぬ。」とあり、折からの以仁王の乱や福原遷都の惨状を語り合つたであろうし、同年十一月七日条には「法性寺座主来る。十一日より善峯寺辺に籠居すべしと云々。」とあるので王法の動揺にも失望して、二十六歳の道心の定まっている慈円は西山での聖の境涯を志向していた。

安元の大火・治承の辻風・治承四年の福原遷都などを「世の不思議」として建暦二年(一一二二)三月下旬頃、鴨長明は『方丈記』を綴った。三十余年の歳月が経過しても、「治承四年卯月のころ」・「治承四年水無月のころ」と繰り返している。長明は「治承」の日々を厭わしい思いで回顧した。現実の世に背を向け、日野の外山に方丈の庵をむすんで沈潜したのであった。「治承」年間の凶悪な世をも自己の内面に取り込み「心」を問題にしたのが『方丈記』である。『治承物語』を企画・創出させたのは承元四年(一一二〇)から建保元年(一一二三)の頃であるから『方丈記』の成立時期と合致する。天台座主の要職を閥歴した慈円は、仏法・王法の諸相を鳥瞰しながら豊富な素材を収集して、ほどなく『愚管抄』で詳述することになる「マノアタリ内乱合戦」(巻四——二七ページ)の模様と世の趨勢と、その渦中にいた各階層の人々の運命を西山で物語化していったのであった。

廟堂にいた人々も歳月の波をのりこえて「治承」の日々を思い返していた。治承三年(一一七九)十月よりまる三年間に亘って蔵人頭を勤めた経房(一一四三〜一二〇〇)もその一人であって、壇ノ浦海戦の前年には「左代弁経房卿来たり、世上の事等を語る。その性頗る貞潔を立つるか。」(『玉葉』寿永三年二月二十二日)とあって兼実と会談している。『元暦改元定記』によれば「経房卿云……就_レ中治承為_二取凶_一、寿永之乱_{茂依}治承之天下大事」出来事也。」と回顧した。最凶悪な「治承之天下大事」が寿永の乱を勃発の誘因と直結しているとの治世把握は『治承物語』の骨子と相即する。そのうえ本物語の重要な局面に登場するとともに「ウルハシキ人ト聞給テ、源二位被_二相聞_一ケル」(延慶本・六末・一五「吉田大納言経房事」)とあるので源頼朝が信任していた人物でもあった。経房は有職故実に通暁しているので後白河院の寵臣にして九条家の家司であった。経房の孫である資経(一一八〇〜一二五二)は、『醍醐雜抄』の説によれば十二巻本『平家物語』の形態へ整えたとされている。慈円圏が組織され始める頃の承元三年(一一二〇)に資経は左衛門権佐であり、文暦元年(一一三四)では正三位前参議に榮進した。六巻本『治承物語』へ再編された治世からみておこう。仁治(一一四〇)改元直前に九条家の家司の二条忠高が当主の道家または教実宛てて書状が差し出された。六巻本『治承物語』を書写したのでおみせしてもよいとの尚々書に記されているので、『治承物語』は道家の主導で再編された。¹⁵⁾この二条忠高の書状には、

『治承物語』六月号平家、此間書写候、此書出来候ハ、可入見
参之由存候

炎旱於_レ今者、不_レ及_三子細_二候歟、内外御祈似_レ無_二効驗_一、理運之哭、無_二申限_一候、暑氣迫_レ身口難_二安堵_一
候歟、依_三此事_一、来十六日、可_レ有_三改元_一候云々

とある。炎暑がつづき、祈雨の修法を行ったにもかかわらず効驗なかった。『平戸記』延応二年（一二四〇）七月一日条に「炎暑氣殊_二如_レ蒸_一、日数已_二涉_一旬月_二、随又属秋天了、世間皆損了、」とあつて、同月六日条に「晩頭、勅問教書到来、依_二炎旱_一可_レ有_三改元_一哉否事、外記例如_レ此」とみえているので、「延応」から「仁治」へ改元されたのも「災異改元」であつた。同日の条には「左代弁、忠高卿、天隆、寶治」とあるので九条家の当主の道家に六卷本『治承物語』書写を伝えた二条忠高は「天隆」・「寶治」案を提出した。複数の年号案を公卿が慎重に審議して最良原案を承認するまでの経緯について、

勘申

年號事、

元康、此文俄於陣見、不覺、遂可勘入、

仁治

新唐書曰、太宗以寬仁治天下、

右依 宣旨、勘申如件

從二位大藏卿兼式部大輔越前權守菅原朝臣為長

（中略）

喜慶、

毛詩曰、有喜慶、禎祥先來見也

康萬、

東觀漢記曰、黎元寧康、萬國協和、

(中略)

諸卿皆止仁治之拳云々、案之(中略)其後治承大乱出来、世々衰弊損亡起自此時、文治天下之乱逆未定、宗盛公已下首入京、梟獄門、又義経、行家、々光等謀叛赴西海、於攝州合戦、遂義経不知行方、数年頼朝卿費心、文治之訓、世俗之説、可分王地歟云々、

〔平戸記〕延応二年七月十六日

新年号「仁治」に議決するに際して、施線部での議事内容は前掲した「治承之天下大事」が発端になって源平の争乱へ陥ったとする経房の見解と合致する。二重施線部で平家一門の滅ぼした源頼朝が弟の義経を追撃に腐心していく顛末を「文治之訓」としていることや元暦二年(一一八五)六月の平宗盛父子の斬首や同年十一月に叔父行家とともに都を落ちていく悲劇を上卿たちが話頭にのせている。年号の出典はあくまで中国の古典であるのは周知のことだが、右文の施線で「治承大乱出来、世々衰弊損亡」とあるので、年号を書名にした『治承物語』が改元定の審議と関連する。改元定の儀式の年号勘文に資する『治承物語』ならば、源頼朝を中心に壇ノ浦海戦をも対象にした物語であつたとの推定もできよう。

「治承」の日々を澠季末代に及んでいく始発の災禍にみまわれた時期として、人々の脳裏に刻まれ、機会あるごとに回顧していた。それが『治承物語』の書名の今一つの由来であろう。

(三) 鹿ヶ谷事件と静賢

物語では平家一門への反撃の最初となる鹿ヶ谷事件をみていこう。平家討伐の密議を延慶本『平家物語』に、其比静憲法印卜申ケル人ハ、故少納言入道信西ガ子息也。万事思知テ振舞人ニテ有ケレバ、平相国モ殊二用テ、世中ノ事共時々云合セラレケリ。法皇ノ御気色モヨクテ、蓮華王院執行ニモナサレナドシテ、天下ノ御

政常二被^三仰合^二ケルニ、「サテモ此事ハ、イカゞ有ベキ」ト法皇仰ノ有ケレバ、「此事努々不^レ可^レ有ト覚候。今ハ人多承候ヌ。何ガシ候ベキ。只今天下ノ大事出来候ナンズ。我君ハ天照大神七十二代、太上天皇ノ尊号ニテ御坐候トイヘドモ、王法ノ代、未ニ成リ、清盛又朝家ニ盛也。其ト申ハ、君ノ御恩ナラズト云事ナシ。然而朝敵ヲ平ル事度々也。サレバ何ヲ以清盛ヲバ失ハセ給候ベキ」ト、無^レ所^レ憚被^レ申ケレバ、成親卿気色替テ立レケルガ、(中略)静憲バカリゾ浅猿ト思テ、物モ宣ハズ、声ヲモ被^レ出ザリケル。

(二本・二二)「成親卿人々語テ鹿谷ニ落合事」

としている。院の近臣達のなかにひとり静賢(論述の都合から物語の「静憲」を、以下では「静賢」とする。)だけは、今後の治承元年(一一七七)五月二十九日の事件発覚から治承四年(一一八〇)八月十七日の頼朝挙兵等の「内乱合戦」等を暗に知らせるかのように「天下の一大事になりました」と予告した。施線部は前掲の経房が回顧した「天下大事」とほぼ同一の静賢の慨嘆である。『愚管抄』にも平家討伐の密議を次のように叙述されている。すなわち、アマリニ平家ノ世ノマヽナルヲウラムカニクムカ、叡慮ヲイカニ見ケルニカシテ、東山邊ニ鹿谷ト云所ニ静賢法印トテ、法勝寺ノ前執行、信西ガ子ノ法師アリケルハ、蓮花王院ノ執行ニテ深クメシツカヒケル。萬ノ事思ヒ知テ引イリツヽ、マコトノ人ニテアリケレバ、コレヲ又院モ平相國モ用テ、物ナド云アハセケルガ、イサヽカ山莊ヲ造リタリケル所ヘ、御幸ノナリクシケル。コノ閑所ニテ御幸ノ次ニ、成親・西光・俊寛ナド聚リテ、ヤウクノ議ヲシケルト云事ノ聞エケル。

(巻五——二四四ページ)

とあり、施線部には万事に通曉した人材でありながら身分不相応なところがなかつたので後白河院・清盛の両者から意見を求められる「マコトノ人」であつたと静賢を慈円は礼讃している。ちなみに「マコト」の語彙は『愚管抄』では、第三十三代崇峻天皇弑逆の事象をもとに仏法受容は時運であると批評して「モノヽ道理ヲタツルヤウハコレガマコトノ道理ニテハ侍也。」(巻三——一三八ページ)と用いられている。王法が動揺せず機能した初代神武天皇から十三代成務天皇が在位していた「正法」の世を経て、徐々に世はきしまはじめ「サダメナキ道理」(巻三——二二二ページ)が顕現してくる。史論を展開していた当時は四天王寺別当であつた慈円は、聖徳太子讃仰

に身を入れている。逆臣の守屋の征伐を果たして第三十四代推古天皇をささえる「権者」こと仏・菩薩が衆生救済のために仮の姿をとった「太子オハシマスラン世」(巻三——一四〇ページ)であるから仏法受容は道理なのであると力説する。『縁起』を真読している慈円が彷彿しているのは明白である。「世ノ道理ノウツリユク事」(巻七——三三四ページ)の概要で用いられている「マコト」の語彙から推定して、静賢への慈円の思い入れは尋常ではない。静賢を「萬ノ事思ヒシリテ引リツ、マコトノ人」とことさらに叙述したことによって『愚管抄』の鹿ヶ谷での平家討伐の密議場面では静賢が浮き上がってしまい、晦渋な文章になっている。これを如何に理解すべきなのか。『続古事談』(第一 王道后宮・第三六話)には静賢の予見を主題にした説話が収載されている。それは兼実の女である任子(一一七三—一二三八)が後鳥羽院とのあいだに皇子が誕生せず、九条家は外戚を築けず、任子も建久七年の政変で内裏を退出する事態を説話の主題としている。すなわち、

宜秋門院ノ御名ノサダメアリケル時、兼光中納言、任子ト云御名ヲタテマツラレタリケルヲ、静賢法印、申テイハク、「白氏ノ遺文ニ任子行トイフ文アリ。シカモ、カレハ、コトアル文也。コノ御名イカバアルベラム」ト申タリケレバ、九条殿、モチヅサセ給テ、アマネク御尋アリケレドモ、サル事アリト申人モナカリケルニ、敦綱バカリコソオボエテ、「サル事侍リ。モトモサルルベキ事ナリ」ト申タリケレ。大才ノ人モヲノヅカラ、ミヲヨバヌ事アリ。チカラヲヨバザル事也。

であつて、本説話の発現する背景としては『玉葉』文治五年(一一八九)十一月十五日条に「一同任子を用ひらるべき由を申す(右大弁定長発語、この中定能、経房等、位字又宜しき由を加へ申す。賀長立字を加へ申す)(中略)長保元年、上東門院、三位に叙し、給ひし日、御堂参内拝賀す。退出の次東三条院に参り給ふ。かの例を追はしむるなり。」とみえており、翌年正月に入内するに先だつて、女の彰子から後一条天皇・後朱雀天皇が誕生して権勢を誇る道長の吉例に倣つて「任子」と命名したのであつた。道長の子の頼通より以来途絶えている外戚関係を築こうとする大いなる宿意であつて、それは『玉葉』の同日の条には「早旦姫君、大原野社に参内す、入内の事を祈らんとめなり。密々の事なり。世の網代車……」とあり、西山の麓にある藤原氏の氏神を祀る大原野社に兼実は参つた

ことから明らかである。当時は慈円は西山で報恩講を行ったり、百首歌を詠作し、^{〔17〕}西山の阿智坂を下り洛中の兼実邸へ出向いていた。この「入内定」の十日後の『玉葉』二十五日条には「今日法性寺座主来らる。」とあるので、このことを慈円は弁えていた。後鳥羽天皇の元服とともに中宮となるが、天皇とのあいだに皇子が生まれず、政変で宮中を追われて出家した任子の悲運をもとに『白氏文集』の「任子行」に通じるので凶と判じる静賢を造型している。九条家の内情に通じる人が語り出した説話であったと思われる。九条家に相応の位置を確保していた静賢が浮上するので、慈円と静賢との交わりの有無から、慈円圈を窺うていこう。

執政の「臣」に就いた兼実の女の任子が後鳥羽天皇の中宮になり、慈円は建久三年（一九二）十一月二十九日には天台座主に補される。その四ヶ月前に西山では、

建久三年八月観性法橋舊迹の西山往生院にまかりて如法経かくとて歌あまたよみて人々の許へ遣なかに殿下へ申

山てらの秋はむかしにかはらねと主なき色はこゝろにそそむ

御返事

（五六六四）

山てらの主なき色はきくひとのよそのむねたにくるしき物を

（五六六五）

（中略）

静賢法印之許へつかはす

法の花のこるにほひにをく露は昔はこふる涙なりけり

（五六七〇）

かへし

法の露ふかき契をむすはすは涙の露もかゝらさらまし

（五六七一）

五六六四番歌で兼実に院主の観性逝去による寂寞とした悲哀を詠じ、五六七〇番歌では仏法が華やかに残る現今にながれる涙は我が師の観性を思慕する涙であった慈円は静賢に対して詠んでいる。慈円は静賢と親交を深めていた。建仁元年（二〇一）八月三日の和歌所で後鳥羽院が主催した「影供歌合」では、静賢は任子に仕えた丹後に、

左持

丹後

百夜ともしちのまろねは頼めけりいつ我恋の限りなるらん

右

静賢

おもひきやわかぬ浦にてみし人に老の波まで袖ぬれんとは

と老境の感慨を詠じた。同年十二月二十八日に石清水社の本殿の前で被講された歌合にも慈円は、

野辺さむし萩の枯葉を片敷て過るあらしをまくらにぞきく

と宮内卿と番い、「左哥、末句すぐるあらしを枕にぞ聞といへる心、尤よろしく侍るべし。よて為_レ勝。」とされ、六条藤家の中心人物として活躍した経家と番い、静賢は、

ねがふ事みつの深山のたびねとや嶺のあらしやおどろかすらん

と詠じているので、歌を通じて昵懇の間柄であった。説話に語られた静賢が任子の境涯の結末を予見する内容と物語の密議で「内乱合戦」を予告する趣向とは類同しよう。前掲した建久三年八月の西山での兼実と静賢との贈答歌をもとに石川一は「観性法橋亡き跡の西山往生院は主のいない寂しさに満ち、あはれは例えようもない程であり、荒れ果てた寺と聞くのも限りなく悲しいと詠む。寿永元年九月一四日、如法経が初めて行われたのも、西山の観性の草庵であった。いわば、九条家による仏法興隆はこの土地から始まったのである。」と論じている。^[18]建仁元年（一二〇一）の歌合以降に在世していた静賢の証憑がないうえ、丹後への歌に「老の波まで……」と詠じているので程なく静賢は没したのであろう。その時より十年近く経過して組織される西山で、先見の明がある静賢が物語化されたとしても決して不自然ではあるまい。延慶本に、

東山二鹿谷ト云所ハ、法勝寺ノ執行俊寛ガ領也。件ノ処ハ、後ハ三井寺ニツギテ吉城也トテ、彼コニ城塚ヲ構ヘテ、平家ヲ討テ引籠ラムトゾ支度シケル。
（一本・三二）成親卿人々語テ鹿谷ニ落合事）

鹿ヶ谷の密議で成親の狩衣で倒れた「瓶子」に「平氏」を掛けて「康頼」、「ソレヲバ頸ヲ取ニハ不レ如力」トテ、

瓶子ノ頸ヲ取テ入リケリ。法皇毛興ニ入セ給テ、……」と猿樂まがいの場面を創り出して、「静憲バカリゾ浅猿ト思テ、物毛宣ハズ、声ヲ毛被^レ出ザリケル」と啞然としている静賢を造型したのであった。ここにも歌の常套である「掛詞」をもとに愉楽の筆致が看取されるであろう。物語の施線部には俊寛の領有する所とあるのに対して、この施線部に該当する『愚管抄』の文章では「東山邊二鹿谷ト云所二静賢法印トテ（中略）イサ、カ山庄ヲツクリタリケル所」とあって、相違するかのようである。このことから、これまでの研究では『愚管抄』を史実と見なし、物語では孤島に流罪されて憤死する俊寛の悲劇との因縁をもたせるための虚構とされてきている¹⁹。が、施線部の「執行俊寛方領也」とは、「法勝寺執行には、保元頃に静憲が補され、平治の乱によつて寛雅に代わり、その後、俊寛が補されたが、鹿谷事件によつて再び静憲に代わつた（中略）俊寛個人の所有ではなく、法勝寺の寺務職として鹿谷周辺を管理していたことを意味する（中略）「俊寛方領」という伝と静憲の山荘という伝とは、全く相反する所伝でもない」との見解が出されるに至つた。²⁰とすれば、俊寛の山荘に変更したとはかならずしもいえない。実際に「法勝寺ノ執行」であつた俊寛が「城也トテ、彼コニ城墾ヲ構ヘテ」・「俊寛方坊二寄合テ」と虚実融合させている物語に依拠して、『愚管抄』では物語の平家討伐の密猿樂まがいの密議を「ヤウくノ議ヲシケルト」（巻五——二四四ページ）と簡約にしたことになろう。この密議の言辞に直結させて、

コレハ一定ノ説ハ知ネドモ、満仲ガ末孫ニ多田蔵人行綱ト云シ者ヲ召テ、（中略）安元三年六月二日カトヨ、西光法師ヲ呼トリテ八條ノ堂ニテヤ竹ニカケテヒシくト問ケレバ皆、オチニケリ。（中略）俊寛ト檢非違使康頼トヲバ硫黄島ト云所ヘヤリテ、カシコニテ又俊寛ハ死ニケリ。（巻五——二四四、四六ページ）

とあって、二重施線部では慈円の釈明の言辞が付されてもいるからである。当該箇所「満仲ガ末孫ニ多田蔵人行綱ト云シ者」の言辞には安和二年（九六九）三月の政変で源高明を裏切つて密告した満仲がイメージされており、歌人慈円の姿勢が看取できるのである。²¹そのことは「多田満仲此由ヲ奏聞シタリケレバ、西宮殿ハ被^レ流給ニケリ」（延慶本・二・中・二六「後三条院ノ事」）との一文によつても傍証されるであろう。換言すれば、二重施線部は『治承物語』に依拠しつつ鹿ヶ谷事件を叙述したことをことわる慈円の注記であつたと思われる。

時空を横断させて道理を説く歌人慈円には「掛詞」の修辭が無意識に作用して俊寛・静賢とともに「法勝寺ノ執行」を勤めた史実が合わさった。また清盛からも信頼される同時に静賢は後白河院の懷刀であり、院の近臣でありながら平家一門のあいだを巧妙に生きた思慮深い人であったこと等が論じられており、この実相をもとに「マコトノ人」と慈円は簡約したことになり、『愚管抄』での静賢との人物評にも歌の「本説」の修辭がはたらいっていたとも推測できるであろう。

(四) 頼政の四天王寺参詣の歌から

治承四年(一一八〇)四月に平清盛の外孫の安徳天皇が即位する。鬱屈している以仁王に源頼政が平家打倒を勸説した物語は『治承物語』にあった。²¹⁾ところが『愚管抄』では以仁王が「王位二御心カケタリ」(巻五——二四八ページ)であった。上横手雅敬は「頼政が首謀者だという観測はまったくなかったのである。物語に見える頼政の激昂はたしかに名文だが、これは時勢を慨する一般論であり、要するに物語作者の思想が語れているにすぎず、これは頼政の言葉だと見ることはできない。」と論じている。²²⁾ここで上横手が言っている「物語作者の思想」には、本稿でこれまでも屢述してきている王法が動揺して「人将」の頼朝が時運にかなうことが挙げられよう。そのため既存の「世継物語」を引き継ぎつつも、同時に東国の武士の動向を見据えた「いくさ物語」となっているのだ、その前哨戦にあたる以仁王の乱には慈円圏での虚構が多分に含まれていたはずであろう。嫡子の仲綱に飼われていた駿馬への宗盛による理不尽な行為に立腹した頼政が、以仁王に勸説したと実相を変更したのであった。頼政の私情が昂じて平家打倒を企てたと物語化するところに愉楽の色彩も帯びてくる。すなわち慈円圏で「遊び心」に傾斜した結果によるものであったと思われる。

物語のなかで潤色された頼政を窺っていくと、頼政は四天王寺に参詣して、

九月廿日余の程に天王寺にまゐりて侍りしに、伊賀入道為業が許よ

り、籠りて侍りけるがかく聞きて遣はしたりし

君来ずは誰に見せまし津の国の難波わたりの秋の気色を

返し

(六四三)

心ある君ましければ共にこそ難波わたりに気色をも見ぬ

(六四四)

又女房大輔参りたりけるに、かくと聞きて遣したりし

底清み掬ぶ亀井の水澄みて心の垢を濯ぎ果てつる

(六四五)

返し

手に掬ぶ亀井の水は西の海を渡す心を濯がざらめや

(六四六)

この事を伊賀の入道聞きて、言ひ遣しける

西の海に渡す心の月の舟亀井よりこそ澄み上るらめ

(六四七)

返歌

我が心亀井に澄めど西へ行く月の舟にぞ乗り移りぬる

(六四八)

又これより入道の許へ遣しける

もろともにいざさは行かん極楽の門迎ひする所なりけり

(六四九)

返し

奥津波君先立てて清き海の舟で急がん西の門より

(六五〇)

とあつて、六四六番歌で清浄な亀井の水で心の垢を濯げば極楽浄土へ渡れると頼政は大輔に贈った。『荒陵寺御手印縁起』の四天王寺金堂が極楽土の東門にあたるとの教えに則っている。大輔と頼政の歌の贈答を知った「伊賀入道」すなわち大原三寂のひとりである寂念から送られた歌に対して六四八番歌で亀井の水で心を濯いでいますので、西方浄土へいく舟に乗り移っていきますと応じた。寺の景観を眺望しながら、寺の門前の彼方にひろ

がつている難波の海は浄土へ通じるとの信仰に基づいて詠じ、六四九番歌では極楽土の東門まで出迎え、寂念と一緒に往生しようと誘っている。他方、既述したように大原三寂の今ひとりである寂超が作者である『今鏡』が『治承物語』創出に重要視されているので、大原三寂を介して慈円は頼政に関心をむけたと思われる。

後一条天皇の菩提所として建立された菩提寿院の池の蓮で、生んだほととぎすの子を鶯が育てているとの評判を伝え聞いた頼政が歌を詠む。すなわち、『今鏡』(内開卷十「敷島の打開」)に、

右京権大夫頼政といひて歌詠める人の、さる事ありと聞いて、わざとたづね来て、その鳥の籠に結び付けられ侍りける歌、

鶯の子になりにける郭公ほととぎすいづれの音にか鳴かむとすらむ

とあるのは留意しなければならない。建久八年(一一九七)、「甘題百首」に詠み換えて「花」の題をあいだにはさんで「鶯」を「郭公」のそれぞれ五首を詠じ、伝統的和歌の世界を踏まえた建仁元年(一一二〇)二月の『老若五十首歌合』の「夏十首」に、

へたつなるうのはななきのこなたにて鶯しのふ郭公かな

(六〇五八)

と、やはり卯の花の中垣を配しながら、ほととぎすが鶯をしのんだと慈円は詠じている。頼政の歌を意識していたような歌である。印象深く頼政のことが慈円の記憶に残る余地が十分にあると判断されよう。

『今鏡』では頼政の歌に対して語り手の姫が「いとやさしく申すめりしか。」と吐露する。これは『今鏡』作者の寂超が、頼政と近い関係にあったからである。この「鶯郭公の子を育てる事」の話柄は、語り手の姫がほぼ語り尽くした時点であるし、つづく「紫式部墮獄説」では、『源氏物語』のなかで仏道帰依した人物を列挙し、物語を書いたために地獄に堕ちた紫式部を弁護した。要するに、この狂言綺語をめぐる言説は、慈円をして『治承物語』を企画する動機になったことは前論でふれたとおりであり、あらためて強調しておきたい。慈円は頼政の歌や『今鏡』を介しても頼政を弁えている。語り手の姫は『源氏物語』「若菜 上」巻で朱雀院が帝位を捨てた一節を引き、

西山の麓に住み給ふなども、仏の道に入り給ひ、深き御法にもかよふ御ありさまなり。

との体験談へ及ぼせた。この「西山」は愛宕山から天王山に至る京都盆地の西をくぐる山なみであるものの、「掛詞」の修辭がはたらけば、洛南と同じ「西山」を呼び起して頼政への関心が慈円圏で増幅するにちがいない。また安元元年（一一七五）七月二十三日から治承三年（一一七九）十月八日の間に十回程あった「兼実邸歌合」にもひんぱんに頼政は参加していた。『玉葉』には「晩景密々と歌あり。清輔、頼政已下会する者十余人、題五首、当座に於て作者を隠し、これを合わせて評定す。」（安元元年七月二十三日）・「密々と歌の会あり。季経朝臣、頼輔朝臣、頼政朝臣已下、十余人会合す。」（安元二年五月二十八日）等とあり、他方では「法眼道快来る。」（安元元年十一月二十六日）と慈円は兼実邸に來訪しているのは、大原の江文寺で百ヶ日の念仏修行をした年であった。翌年には比叡山無動寺で千日入道をはじめる颯爽とした二十歳の行者の慈円は、二日後に出家する七十二歳の頼政の様々な事柄を兼実から聞いていたと推測されてくる。

すでに四天王寺別当を閥歴している歌人慈円は、四天王寺参詣の歌を詠じた頼政に共鳴したならば、頼政が仁王に勧説する物語を企画するであろう。

（五） 慈円圏・慈円周辺圏の慈賢からも

源頼政の孫の慈賢（一一七五～一二四二）は、慈円に師事した天台僧である。しかも父の頼兼は従五位下となつて鎌倉に下り、石見守を歴任した武将であつた。以仁王の令旨を受け取つて挙兵した頼朝が幕府を開くまでの経緯は一族の語り草となつていたのであるから、東国の源氏の動向をも含めて「治承」の争乱の全容を慈賢は詳しく把握している。台密事相に関する慈円の口伝を慈賢が記した『四帖秘決』（全五卷）第四卷には、

承元四年三月二日。於西山往生院被授快雅阿闍利於別行經。同聴祐眞々々。慈賢等也。重受也

とあるので、『慈鎮和尚夢想記』を起草した一年近く後に慈円は往生院で慈賢にも別行経を講説したのである。

慈賢は寛喜二年(一二三〇)九月に法性寺座主になり、仁治元年(一二四〇)八月には第七十八代天台座主になる。その頃に九条道家の主導した慈円周辺圈が組織されていたのである。そのため定家は「殿下(東帯・簾中)・右内府・大納言定通・雅親・家良・大将・通方・中納言隆親・実有・家光(笏)・参議経高(笏)・実世・有親(中略)慈賢曼茶羅供」。(『明月記』文暦元年(一二三四)九月二十五日条)とあつて道家主催の法会に招かれていた慈賢を捉えていた。

父の頼兼は文治元年(一一八五)六月九日には一ノ谷合戦のとき捕虜となつた平重衡の身柄を受け取つて上洛して、南都に護送している。北の方と重衡が今生の別れをする状況を『愚管抄』には、

大津ヨリ醍醐トヨリ、ヒツ川ヘイデ、宇治橋ワタリテ奈良ヘユキケルニ、重衡ハ、邦綱ガヲトムスメニ大納言スケトテ、(中略)コノモトノ妻ノモトニ便路ヲヨロコビテヨリテ、只今死ナンズル身ニテ、ナクく小袖キカヘナドシテスギケルヲバ、頼兼モユルシテキセサセケリ。大方積悪ノサカリハコレヲニクメドモ、又カハル時ニノゾミテハキク人カナシミノ涙ニヲボホユル事ナリ。

(巻五——二六七ページ)

とある。父の直話をもとに『治承物語』で潤色され、それが史論に取り込まれた。そのことは現存『平家物語』諸本ともに南都の大衆へ引き渡される途中で日野に隠れている北の方と面会が許された重衡をめぐって「源三位入道子息、藏人大夫頼兼ガ奉ニテ具テ上ラル。(中略)武士共モサスガ石木ナラネバ各涙ヲ流テ、「ナニカ、苦ク候ベキ」トテ免シ奉テケリ(中略)「是ニ召替ヨ」トテ、合ノ小袖、白帷取出テ奉給ケレバ、中将「ウレシクモトテ……」(延慶本・六本・三五「重衡卿日野ノ北方ノ許ノ行事」と語っているからである。『愚管抄』の施線部は『治承物語』の内容を簡約にしたと思われる。そのため仏法王法相依の道理に則りながら、憐憫の情に打たれている人々を添えて、右文末尾で重衡の人物評をした。また神器の都入りの「御共ノ武士ニ(中略)伊豆藏人大夫頼兼」(延慶本・六本・一八「内侍所神璽官庁入御事」と語つてもいる。このように頼兼が物語に登場するのは、物語の素材を提供したり物語化に参画したのは慈賢であつたからであろう。

(十六) 「治承」の清盛と頼政と以仁王そして慈円園

道理として「武者ノ世」・院政の世に推移し、『愚管抄』別帖の二条天皇の在位する治世では武士の本分をまもり「アナタコナタシケル」清盛であった。その後の六条天皇・高倉天皇の在位する治世では清盛は「中ノ殿ムコニテ世ヲバイカニモ行ヒテント思ヒ」(巻五——二四一ページ)はじめ、関白基房を壻にし、さらには「四歳ノ内ヲオロシマイラセテ、八歳ノ東宮高倉院ヲ位ニツケマイラセテケリ。コノ新院ヲバ六條院トゾ申ケル」(巻五——二四二〜三ページ)とあるように六条天皇を退位させて娘婿の東宮を天皇にする。高倉天皇である。そして「治承二年十一月十一日六波羅ニテ皇子誕生思ノ如クアリテ、思フサマニ入道、帝ノ外祖ニ成ニケリ」(巻五——二四三〜四ページ)とした。天皇家と外戚関係を築き、安徳天皇即位にともない近衛基通を摂政にする。この時点で道理に悖る「ヒガ事」をする清盛に対して鹿ヶ谷で後白河院や院の近臣達の密議が叙述されるわけである。道理である院政の世を冒瀆しているとの意図のもとに「ソノ、チ院中アレ行ヤウニテ過ル程ニ……」(巻五——二四四ページ)との言辭が添えられ、鹿ヶ谷での平家討伐の密議から多田藏人行綱密告・西光斬首・成親の流刑から刑死・俊寛流罪が概括される。「サテ又此年京中大焼亡ニテ、ソノ火大極殿ニ飛付テ焼ニケリ。コレニヨリテ改元、治承トアリケリ。入道カヤウノ事ドモ行ヒチラシテ、西光ガ白状ヲ持テ院リテ」(巻五——二四六ページ)と叙述された。二重施線の動詞「行フ」・「為」に補助動詞の「チラス」が接続して「やりたい放題」に廟堂を牛耳るとの意味になつてくる。二重施線の文言とほぼ同一の言辭が物語にも「入道ハカヤウシチラシテ」(二末・三三「明雲僧正天台座主ニ還補事」)等とある。「治承」に改元されてからは「ヒガ事ノ世」(巻六——三二七ページ)へと陥つたと慈円は史論で揚言する。

治承年間にあつた個別の事象を逐次、叙述する。その一方で時間軸を遡らせて、「嘉応二年」(二一七〇)の「臣」の藤原基房への平家側による陵辱事件を王法動搖の事象として史論の正面に押し出した。『治承物語』と対応している『愚管抄』の文章は晦渋をきわめる。「コノ小松内府ハイミジク心ウルハシクテ、父入道ガ謀反心アルト

ミテ」(巻五——二四六ページ)とあるように物語で対照化された重盛と清盛との人物評に則っている。そのため、不可思議ノ事ヲ一ツシタリシナリ。子ニテ資盛トテアリシヲバ、基家中納言増ニシテアリシ。(中略)松殿ノ攝籙臣ニテ御出アリケルニ、忍ビタルアリキヲシテアシクイキアヒテ、ウタレテ車ノ簾切レナドシタル事ノ有シヲ、フカクネタク思テ、関白嘉應二年十月廿一日高倉院御元服ノ定ニ参内スル道ニテ、武士等ヲマウケテ前驅ノ髻ヲ切テシナリ。コレニヨリテ御元服定ノビニキ。サル不思議アリシカド世ニ沙汰モナシ。次ノ日ヨリ又松殿モ出仕ウチシテアラレケリ。コノフシギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテアリケルニコソ。

(巻五——二四七〜四八ページ)

物語の「殿下乗合」を対置して、最初の施線部で「不可思議」と把握して、後にも「コノフシギ」・「不思議アリシカド」と三回も同じ言辞を繰り返すのは尋常ではない。論理では「……改元、治承トアリケリ。入道力ヤウノ事ドモ行ヒチラシ」(巻五——二四六ページ)ていく清盛指揮の典型の事象として右文は叙述されるはずの内容であった。「治承」の清盛の「ヒガ事」としては恰好の事象ではあるう。が、物語ではなく「末代ノ道理」を説くうえから直叙したのであった。史論では「治承」の清盛が通底させている当該箇所には、『治承物語』が語る悪逆無道な清盛を重ねさせつつ「イミジク心ウルハシ」き重盛による特別異例の実相であったこととわっている注記をしたわけであった。後の施線部の「コノフシギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテ」との言辞には、「殿下乗合」以降の物語展開と同質の視座のもとに叙述されている。王法がますます動揺し、王法を安寧に導くために挙兵する源頼朝がすでに慈円の視野に入っている。それは『愚管抄』の挙兵する箇所と同じ言辞の、

物ノ始終ハ有^レ興^レ不思議ナリ。其時モカ[、]ル又打力ヘシテ世ノヌシトナルベキ者

(巻五——二五一〜五二ページ)

があるからである。「武者ノ世」の覇者になつていく経緯が右文以降に叙述され、「威徳アル人」(巻七——三三六ページ)としての器量をそなえた頼朝をめづつては後述するとして、執政の「臣」の基房への陵辱事件には実相と『治承物語』とがせめぎ合つて晦渋なつてしまい、史論と物語の「殿下乗合」との微妙な「あわい」が看取される。

そこで源平争乱の前哨戦にあたる以仁王の乱を慈円圈から窺つていこう。

「行ヒチラシテ」していく清盛は、鹿ヶ谷の密議発覚後の西光への厳しい拷問に顯著である。そのことを物語では精彩に語った。西光は「残りナク落ニケリ。白状四五二被_レ記タリ。」（延慶本・一末・十一「西光法師擲取事」）とあり、その白状をめぐって『愚管抄』も「西光ガ白状ヲ持テ院ヘ参リテ、右兵衛督光能卿ヲ呼出シテ、「カ、ル次第二テ候ヘバカク沙汰シ候ヒ。是ハ偏ニ為_レ世為_レ君二候。我身ノ為_レハ次ノ事ニテ候」トゾ申ケル。」（巻五——二四六ページ）とあつて、院政の主体者である後白河院の近臣の光能に白状の書状を清盛は手渡したとするのは白眉であろう。慈円の筆が冴えるのは、『治承物語』に引きずられたことに起因していよう。

光能の妹と以仁王とあいだに生誕したのが真性（一一六七—一二三〇）であつた。真性は建仁二年（一二〇二）十二月二十九日に慈円の弟子となり、『明月記』建仁三年（一二〇三）二月六日条には、

吉水僧正の御房に参ず（昨日、此所に御坐す。白川に於ては、宮の僧正御坐す。伺候する物等、皆彼の御所に御留まる）。

とみえ、慈円から天台密教を学び、朝野に輝かしい名声を確立している慈円の自坊の白川坊で活躍していたからであつた。また『三長記』元久三年（一二〇六）二月二十七日条には次のようにある。すなわち、

今日院尊勝陀羅尼供養也。予依奉_二公祈年穀奉幣_一、不_レ運経早出了。御導師宮僧正、御室御弟子、故高倉宮御子也。

後鳥羽院の滅罪・厄除の法会が厳修され、真性は導師を勤めたと同年に参議になつた藤原長兼は記す。その翌月七日には執政の「臣」九条良経が頓死した。元久三年四月に改元されて建永元年になるわけだが、『愚管抄』には、「建永元年ノコロロヒ、仲國法師ハ、コトナル光遠法師ガ子ニテ、故院ニハ朝夕二候シガ。妻ニツカセ給テ、（中略）一旦ノ己國ハ邪魔ニセラレナンズルハト、アサマシクコソ。」（巻五——二九一—二九四ページ）・「又建永ノ年、法然房ト云上人アリキ。マチカク京中ヲスミカニテ、念佛宗ヲ立テ専宗念佛ト號シテ、（中略）誠ニモ仏法ノ滅相ウタガイナシ。コレヲ心ウルニモ、魔ニハ順魔逆魔ト云」（巻五——二九四—二九五ページ）等とあるように、その当時も「治承」年間と同じように災厄が頻繁にあり、

コノ春三星合トテ大事ナル天変ノアリケル。司天ノ輩大ニヲチ申ケルニ、ソノ間慈円僧正五辻ト云テシバシアリケル御所ニテ、トリツクロイタル葉師ノ御修法ヲハジメラレタリケル修中ニコノ変ハアリケリ。(中略)サテホドナクコノ殿ノ頓死セラレニケルヲバ、晴光ト云天文博士ハ、「一定コノ三星合ハ君ノ御大事ニテ候ツルガ、ツイニカラカイト消候ニシガ、殿下ニトリカヘマイラセラレニケルニ」トコソタシカニ申ケレ。

(巻六——二八九〜九〇ページ)

とあつて、天変の「三星合」があつたので葉師如來に息災招福を祈請した慈円の功業で危殆に陥つていた治天の「君」の後鳥羽院は救済される。「君臣合体魚水の交わり」の道理が通底し、「臣」の良経頓死を「君」の後鳥羽院の身代りとする天文博士の占文をことさら添えた。慈円の「仏法」の修法によつて「王法」に君臨している院を守護したと揚言するからには、仏法王法相依の道理にも則っている。良経頓死から一ヶ月経過したとき、『天王寺旧記』建永元年(一二〇六)四月二十四日条には、

左中将從二位道家卿奉^レ為^ニ其先君故摂政太政大臣殿下御追善^一。以^ニ名香一裹、并御遺筆阿弥陀經一卷、和歌色紙形一枚^一、令^レ寄^ニ納当寺念仏堂^一。

嫡子の道家が父のための追善供養を四天王寺で行つた。家運後退の椿事だけに大叔父慈円の四天王寺別当就任の営為と連続している。すなわち翌年の承元元年(一二〇七)四月五日に当主の兼実も薨去し、家の最長老となつた慈円は『縁起』の寺塔整備拡充をはかれば「官位榮達・子孫繁榮」がもたらされるとの教えによつて、同年十一月三十日に四天王寺別当に慈円は就く。道家も慈円と同様に九条家の挽回を目論んだからであつた。翌年十一月に所勞により別当を辞任するが、高弟の真性を四天王寺別当に就け後事を委ねる。別当離任中の慈円の許に高弟の真性が来訪している。道家は我が日録に「大僧正自天王寺可^(真性)皈京云々」(『玉葉』承元五年(一二二二)七月十日)と刻み込んでいたので、真性は帰洛しては西山隱棲中の慈円と会つて、常日頃の寺の状況を語つていよう。厚誼のこめられている真性の報告に接したならば、「治承」年間の王法が烈しく動揺した典型的な親の以仁王死去に至る顛末をめぐる素材を子の真性からも入手し、企画した『治承物語』のなかで大いに物語化されていく。

『愚管抄』の以仁王の乱をめぐる文章を掲出して、『治承物語』との関連をみていくと、

四年五月十五日ニ、高倉ノ宮トテ、院宮ニ、高倉ノ三位トテオボエセシ女房ウミマイラセタル御子ヲハシキ。
 諸道ノ事沙汰アリテ王位ニ御心カケタリト人思ヒタリキ。コノ宮ヲサウナクナガシマイラセントテ、頼政源
 三位ガ子ニ兼綱ト云檢非違使ヲ追ツカヒニマイラセテ、三條高倉ノ御所ヘマイレリケルヲ、トニ逃サセ給テ、
 三井寺ニ入セ給タリケルヲ、寺法師ドモモテナシテ道々切フタギタリケルニ、頼政ハモトヨリ出家シタリケ
 ルガ、近衛河原ノ家ヤキテ仲綱伊豆守、兼綱ナドグシテ参リニケリ。宮ヲニガシマイラセタル一スチニヤト
 ゴ人ハ思ヘリケル。コハイカニト天下ハ只今タゞイマトノ、シリキ。サテタゞヘテオハシマスベキナラネバ、
 落テ吉野ノ方ヘ奈良ヲサシテヲハシマシケル。頼政三井寺ヘ廿二日ニ参テ、寺ヨリ六波羅ヘ夜打イダシタテ、
 アル程ニ、オソクサシテ松坂ニテ夜明ニケレバ、コノ事ノトゲズシテ、廿四日ニ宇治ヘ落サセ給テ、一夜オハ
 シマシケル。廿五日ニ平家押カケテ攻寄テ戦ヒケレバ、宮ノ御方ニハタゞ頼政ガ勢誠ニスクナシ。大勢ニテ馬
 イカダニテ宇治河ワタシテケレバ、何ワザヲカハセン。ヤガテ仲綱ハ平等院ノ殿上ノ廊ニ入テ自害シテケリ。
 ニエ野ノ池ヲスグル程ニテ、追ツキテ宮ヲバ打トリマイラセテケリ。頼政モウタレス。宮ノ御コトハタシカナ
 ラズトテ御頸ヲ萬ノ人ニミセケル。御学問ノ御師ニテ宗業アリケレバ、召テ見セラレナンドシテ一定ナリケレ
 バ、サテアリケル程ニ、宮ハイマダオハシマスナド云事云ヒ出シテ、不可思議ノ事ドモアリケレド、信ジタル
 人ノオコニテヤミニキ。サテヤガテ寺ヘハ武士イレテ、堂舎ヲノゾキテ房々ハオホクヤキハラハセテキ。

(巻五——二四八—四九ページ)

粹で括った一節にあるように諸学諸芸を研鑽に励む以仁王との寸評は、『今鏡』の「御文にもたづさはらせ給ひ、御など書かせ給ふと聞えさせ給ふ。」(第八「腹々の御子」)に対応するが、むしろ「御手跡ナドウツクシクアソバシテ、和漢ノ才秀給ヘル仁ニテヲハセシカバ」(延慶本・二中・八「頼政入道謀反申勸事」)により近似する。施線部では「王位ニ御心カケル」以仁王とあるが、現存『平家物語』諸本ともに以仁王に勧説して挙兵を決起を促すのは頼政である。既述したとおり実相から離陸した物語と史論とのせめぎ合いが看取される。『愚管抄』では「思サマニ入道、

帝ノ外祖ニナリニケリ。」(巻五——二四四ページ)と清盛の「ヒガ事」を摘記し、以仁王を正面に押し出すわけである。後白河院の第二皇子でありながら、仁安三年(一一六八)四月に清盛の妻時子の妹である滋子が生んだ第七皇子の高倉天皇が即位し、親王にもなれず苦杯を喫して快々として樂しまずに日々を送ってきている以仁王の悲運を真性を介して慈円は同情できたからに他ならない。さらに「近衛河原」の大宮の御所すなわち閑院家公能の女である多子の御所で元服していたので、閑院家からの以仁王へのはたらきかけがあり、治承四年(一一八〇)四月には安徳天皇が即位したので平家への恨みを一層つのらせていったのである。²⁹この実相が真性からもたらされ、当時の置かれていた以仁王の状況を弁えて慈円は右文で「王位ニ御心カケル」と象徴的に記した。

真性という慈円圏の人材から刮目すべきもう一つの事実を提示しよう。それは院の近臣の光能の妻は安達遠元(30)の女であり、遠元は大番役で上京し東国との強力なパイプ役を担っていたのである。延慶本『平家物語』では頼朝が征夷大將軍になる夢をみたのは藤九郎盛長、したがって遠元の叔父なのである。盛長は頼朝の物語を先取る役目が付与されているキーパーソンであった。³¹盛長は真性の大叔父にあたっているからには当然であろう。慈円圏にいる東国出身の宇都宮入道蓮生は、宇都宮氏の命脈を保つために奔走する一方では定家の嫡子の為家を婿取りする世才に長け、源家の譜代の人である点で一致する。そのうえ頼朝が死去したときに出家して盛長は蓮西と号し、盛長の嫡子景盛も將軍頼家を怨んでいると讒言するものが出て誅殺されそうになった。政子からの取りなしで、起請文を出すことで事なきを得たのであった。³²蓮生も出家して上洛する以前に北条氏の執権政治の世になったので、謀反を計画しているとの罪名が下り、出家の証しの誓と恭順を誓う誓詞とを提出したのである。この境涯からも蓮生は、東国の安達氏を親族にもつ真性と西山で出会って交歓したはずである。

頼政が以仁王に勧説したと虚構する物語では、「抑今度ノ謀叛ヲ尋レバ、馬故トゾ聞エシ。」(延慶本・二中・二九「源三位入道謀叛之由来事」)とした。治承四年(一一八〇)から三十余年の歳月を経た承元末年・建暦・建保年間の現今では九条家の立子の中宮になっている時運のもとで王法興隆への熱い期待が慈円圏にはみなぎり、再言するが「遊び心」の横溢して愉楽の文事として『治承物語』では捉え直されていたのである。

次に『愚管抄』の謀反が露見して以仁王が三井寺に逃走する文章中の二重施線部の「オソクサシテ」・「松坂二夜明ニケレバ、コノ事ノトゲズシテ」の箇所はとくに晦渋であるのは周知のとおりである。それは三井寺では無謀とする慎重論があつて夜襲をめづつて軍議が紛糾して、結局、仲綱が率いる大手は栗田口と山科に通じる松坂で引き返したと『治承物語』が語った内容を参照したが、軍議とその前後の物語を省略したからであつた。³³⁾その省略理由は那邊にあるのか。清盛は延暦寺の頼勢を挽回しようとしていたし、南都寺院から延暦寺の変節が批判されている実相があつた。以仁王を迎え入れた三井寺の動向を展開するのにあわせて指弾する「治承」年間の清盛を叙述の正面に据えている史論では、寺門の三井寺と山門の延暦寺とが軋轢している趨勢下で、三井寺を称揚することを潔しとしない慈円の意識が作用している。例えば山門の大衆の神輿に矢を放つことを命じた師通は冥衆の怒りを被つて没する物語（延慶本・一本・三一「後二条殿滅給事」）が『愚管抄』にことさら詳述されている。³⁴⁾当該箇所と反対の関係で物語を史論に反映させたので「オソクサシテ」と暈かしたのである。

次に掲出した『愚管抄』の右文にある頼政の子息の兼綱にふれた箇所では「頼政源三位」として、それにつづく二重施線部には「頼政ハモトヨリ出家シタリケル」とあつて入道した頼政として取上げ、以仁王の大宮の御所の「近衛河原」を焼き払い、三井寺へ兼綱を伴つて頼政は参上したとなつている。やはり晦渋ではあるまいか。実相に則つていくと、治承二年（一一七六）十二月二十四日源頼政は平清盛の奏請によつて従三位になり、翌年十一月二十八日に出家した。以仁王の謀反露見の日から頼政が出走までの八日間について、『玉葉』等には何事もふれないし、後年の編纂された史料類にも記載がない。頼政父子は出走の前日まで以仁王追討軍の一員にかぞえられていたように見受けられ、謀反の形跡はない。多賀宗準は「（以仁）王と頼政との交渉の有無も明らかでない。」と訝つている。³⁵⁾そこで頼政は慈円と同じ歌人であつたことに着目してみよう。

晩年には一人暮らしをかこつている頼政のところへ歌人俊恵が「この頃どうしていますか」と歌を届ける、すると、

偽の身をばえ抓まじ抓むならば一人は寝じを思ひやらなむ

と返歌して「偽りの我が身を抓ることは出来得ません」と頼政は率直に告白しており、また、

限りあれば月は今宵も出でにけり昨日見し人の今日はなき世に

(三三四)

と詠じたのであった。絶望的な悲哀がたしかに浮き出ている。平家の追撃をうけて宇治で合戦して負傷のすえに自殺したのは当時としては高齢の七十七歳であった。それを見通す歌がある。すなわち、

よそにのみかく聞き聞きていつか又はかなき後を人に問はれん

(三三六)

他人事とばかり聞き続けてきているが、いつかまた同じく私のがはなくなつて人に弔問されるであろうと詠じた。偽善的な生涯に対して痛恨の涙を流しており、最晩年の切羽詰まった情念が湧出し、以仁王の謀反に荷担していく動機が頼政の家集からたどれる。³⁶⁾現存『平家物語』諸本ともに頼政の辞世の歌が配されている。すなわち、

念仏百返計唱テ、和歌ヲゾ一首読レケル。

埋木ノ花サク事モ無リシニミノナルハテゾ哀ナリケル

此時歌ナド可^レ読トコソ覺エネドモ、心ニ好シ事ナレバ、加様ノ折モセラレケルコソ哀ナレ。

(延慶本・二中・一九「源三位入道自害事」)

であり、「武将としての死を満足する思い」からの絶唱であった。³⁷⁾安堵の思いを籠めており、頼政の実詠歌の延長線上に位置づけられよう。以仁王が「王位ニ御心カケタ」、そこで以仁王かその周辺にいる人が頼政に誘いをかけたが、清盛から破格の厚遇を受けている身であったから、おそらく決断には相当の煩悶があったであろう。その実相を慈円は念頭に置き、他方では『治承物語』を配置して「……頼政モウタレヌ」と簡約に史論では摘記したのである。「治承」年間の道義に悖る行いをする平家一門に対する源氏の血がさわいで人生の最後を賭ける頼政の複雑微妙な心情を弁えていた孫の慈賢からの情報もあったであろう。また以仁王の乱があった治承四年(一一八〇)は、千日入堂を完遂した時である。慈円の生涯でも節目にあたっていた。特別の年であったから、頼政の最期をめぐる一部始終を衝撃をうけて記憶され、同じ歌人を追悼する営為として物語化を慈円はすすめたといえよう。

慈円圈の主要メンバーである行長から、以仁王の乱を窺うと、『玉葉』治承四年五月二十六日条に「三井寺に坐する宮、頼政入道相共に去夜半許り、逃げ去り南都に向ふ。(中略) 頼政の党類併しながら誅殺したんぬ。」とあり、翌日の二十七日条には、

内議あるか。隆季卿上達部の座に着く後、藏人左少弁行隆進み寄り、(中略) 即ち行隆簾下に来たり、着座すべき由を催す。(中略) 路次に於て頼政入道以下の軍兵等を誅殺すると雖も(中略) 即ち行隆御所に参り、議定の趣を奏す(奏聞の後、入道相国に示すか)。

乱の顛末をめぐつての審議の一部始終を清盛に行隆が伝えたのであった。治承三年(一一七九)に清盛によつて左少弁へと昇任している行隆は、清盛に甲斐甲斐しく仕えている模様を兼実は捉えていた。行隆の面影が諸本中では延慶本では最も濃厚であるから、以仁王の謀反をめぐる廟堂の対応、ことに清盛が激怒する実相も子の行長に詳しく伝わったはずである。そのため委曲を尽くして以仁王の乱が物語に仕立てられていったと思われる。

前掲した『愚管抄』の文章の波線部では、以仁王が生存しているとの流言とそれを真に受けた人がいたとある。この慈円の言説に着目するとき、『玉葉』元暦二年(一一八五)七月十四日条に「或人云はく、隆憲法印云はく、三条宮必定現存すと云々」とみえ、同月二十三日条には、

二十三日^{庚辰}夜に入り宗雅来たりて云はく、三条宮御現存、院より御使を献らるる由、猶政所を以て示し送るなりと云々。この風聞、同じく近日謳歌する所なり。事若し実ならば、天下の大幸。

とし、翌月の八月三日条には「三条宮おはします由謬説。」とあり、その次の日である四日条では、

三条宮の御事、或寺の僧の説を以て雅縁僧都これを聞く。雅縁又澄憲に語る。澄憲かれの説を以て証拠を問はず、子細を尋ねず、左右無く法皇の間に達す(同じく泰経卿これを奏す)。仍つて法皇悦び、(中略) 仍つて本体の寺僧を搦め取り了り、子細を問ふ処、(中略) 偏に渡世の方法にめ、詐偽を構ふる所なり(中略) 雅縁の尾籠に於ては、是非を論ずるに能はず。

とあつて、某の僧が言つたものを鵜呑みにした雅縁を記主の兼実は指弾したのであった。確かめずに後白河院に

奏上した澄憲についても、やはり同日の条には、

澄憲は通憲法師の子なり。童に弁辞を顕はすのみにあらず、政理に熟する由と云々。而るにこの条に於いては、思慮無しと謂ふべきか。

と悲憤慷慨している。仏典の註釈のほか『言泉集』等の唱導書を著し、弁舌では聴衆を魅了させる説法の名手の澄賢を詰っている。他方、同月十二日から翌月二十二日・二十三日・二十六日・二十六日・二十七日・三十日の各条に慈円来訪を兼実は日録に記載している。この実相を兄を通じて弁えていた。そのため『治承物語』を対置しつつ、『愚管抄』では以仁王の乱を叙述しているので右文の波線部では「信ジタル人ノヲコニテヤミニキ」と慈円は簡約にしたのであった。この慈円の叙述姿勢に照らせば、実相と『治承物語』で「埋木ノ花サク事モ無リシニ……」の歌を詠じて自害する頼政の最期の場面とを踏まえながら「……頼政モウタレヌ」と『愚管抄』では簡約していると思われる。

以仁王の乱に関する確かな素材が豊富に慈円圈に堆積していた。愉楽の文事として『治承物語』を創出していった。それが『愚管抄』の文章から逆照射できる。

(七) 深慮遠謀する源頼朝と『宇治大納言物語』

『慈鎮和尚夢想記』に「海底ニ宝剣ガ没シタ後ハ其徳ニ於テハ人將ガ任ウ歟」とある。施線の「人將」は源頼朝であった。たびたび言及してきているように甥の九条良経が執政の「臣」のまま頼死し、さらに兄の兼実も薨去したこともあって西山に慈円は隠棲した。『愚管抄』では良経頼死に直結させて「天下ノヲドロキ云ハカリナシ。院力ギリナクナゲキヲボシメシケレド云ニカイナシ。サテ力及バデ此度ハ近衛殿ノ子、當時左大臣ニテモトヨリアレバ関白ニナラレニケリ。コノ春三星合トテ大事ナル天変ノアリケル。」(巻五——二八九く九〇ページ)とある。土御門

天皇の在位する廟堂では執政の「臣」は近衛基通が権勢を誇り、「三星合」の他に落雷の天変そして邪魔・怨霊が猖獗する地異もたて続けに頻発する治世に陥ったとし、「慈円僧正ナド熾盛光法ヲコイナドシテイデズナリタレド、御ツ、シミハイカバガニテアルホドニ、(中略)「上皇信ヲイタシテ御祈念ナドアリケルニ御ユメノ告ノアリケルニヤ」トゾ人ハ申ケル。忽ニ御讓位ノ事ヲ行ハレテ。承元四年十一月廿五日ニ受禪事アリケリ。」(巻五——二九八ページ)と後鳥羽院が祈請されたところ「御ユメノ告」があったから、皇位継承を決断されたところ。皇帝年代記の土御門天皇の条にも「此君ハタヘタル彗星出テ数夜ウセズ、消テ後、又程ナク出ケレバ、ヨウクニ御祈請求アリテオリサセ給ニケリ。」(巻二——二二二ページ)とあるので、この『愚管抄』別帖の文章は、世に徳政が足りず、在位する天皇が善政を敷かなければ「天」は天変地異を下して警告するという天人相関の理に則っているのは歴然である。施線の「御ユメノ告」すなわち冥衆の「夢告」を傍証する当時の日記類や史料は管見には入らない。とすると前年の承元三年(二〇九)三月に「臣」のまま頓死した良経の女の立子が東宮に入内した九条家の慶事を直視して『慈鎮和尚夢想記』を仕上げていった所業からみていく必要がでてこよう。この東宮(後の順徳天皇)と立子とのあいだに懷成親王(後の仲恭天皇)が生誕する。立子入内を直視して壇ノ浦海戦で神器喪失の代替として「人将」が王法に参入するのは時運であるとした『夢想記』の論理が『愚管抄』の道理の雛型である。『愚管抄』のモチーフは聖徳太子の霊告であった。土御門天皇から順徳天皇へ皇位継承することは霊告符合への一階梯であるから、施線の「御ユメノ告」は冥顕二法の道理から慈円が作為したと思われる。

天人相関の理がもつとも顕著に叙述されているのは『愚管抄』別帖の一条天皇の条の、
……御堂ト云誠ノ賢臣ソノ世ニヨハセズハ、アヤウカルベカリケル世ニヤ。

大方コノ一條院ノ御時世ノ中ノ一ツギメニテ、一部ノ運イカニモクルベカリケルニヤ。寛和二年七ニテ御位ノ後、次年号永延三年六月下旬ニ、彗星東西ノ天ニミヘケルヨリ、八月ニ改元、(中略)大疫癘ヲコリテ都鄙ノ人多ク死ニケリ。(中略)最勝講ナドハジメヲカレテ後、御堂又マジリ物モナク世ヲヲサメ給テ、世ハヒシト落居ニケリトミュ。

(巻四——一八三〜一八四ページ)

とみえるうちの施線部である。引用した右文の冒頭では賢臣の藤原道長が在世していなかったならば危機に瀕した治世であつたとし、一条天皇の在位する治世を概観した。そのあとに道長を仏法王法相依の道理から金光明最勝王経を講説する法会等を興して世の安寧をもたらした「臣」であると讃美する。他方では、右文に及ばせる以前に「臣」の役割を、道長の心情にそくして叙述していた。すなわち、

カ、リケルホドニ、一條院ウセサセタマイテ後ニ、御堂ハ御遺物ドモノサタアリケルニ、御手箱ノアリケルヲヒラキ御覽ジケルニ、震筆ノ宣命メカシキ物ヲカ、セヲハシマシタリケルハジメニ、三光欲^レ明^{ナカント}覆^ニ重雲^ヲ大精暗^{シト}アソバサレタリケルヲ御覽ジテ、次ザマヲヨマセタマハデ、ヤガテマキコメテヤキアゲラレニケリトコソ、宇治殿ハ隆國宇治大納言ニハカタリ給ケルト、隆國ハ記シテ侍ナレ。大方御堂御事ハ、タトヘバ唐ノ太宗ノ世ヲコシテ、我ハ堯舜ニヒトシトマデオモハセ給タリケルト申ヤウニ、御堂ハ昭宣公ニモ大織冠マデニモヲトラヌホドニ、正道ニ理ノ外ナル御心ナカリケリトミユ。ワガ威光威勢トイフハ、サナガラ君ノ御威也。王威ノスエヲウケテコソカクアレト、ワタクシナクオボシケルナリ。ソノ證據ハ、萬壽四年十二月四日ウセ給ケル御臨終ニアラハナリ。思ノゴトク出家シテ多年、九體ノ丈六堂法成寺ノ無量壽院ノ中尊ノ御前ヲ閑眼ノ所ニシテ、屏風ヲタテ、脇足ニヨリカ、リテ、法衣ヲタバシクシテオナガラ御閑眼アリケルコトハ、ムカシモイマモカ、ル臨終ノタメシアルベシトヤハ。(中略)返々ヤムゴトナキコト也。コレハ一條院モアルマ、ニ御覽ジシラセ給ハデ、カ、ル宣命メカシキモノヲカキヲカセ給テ、トクウセサセ給ニケルニ、御堂ハ其後久シクタモチテ、子孫ノ繁昌、臨終正念タグイナキヲ、御心ノ中ニ是ヲフカクミトホシテ、(中略)マキコメテ、ヤキアゲサセ給ヒケンヨバ、伊勢太神宮・八幡大菩薩モアハレニマモラセ給ケントコソアラハニサトラレ侍レ。

(卷三)——一七三〜七四ページ

であつて、施線で崩御後に「臣」の道長は私心に拘泥するとの一条天皇の宸筆をめぐる説話を取上げて、二重施線部に道長自身は「フカクミトヲシテ」立派な政治行動をした「臣」であつたと弁明した。一条天皇は邪推しているとの筆致で『愚管抄』巻三の文章を括つたのである。つづけて巻四でも一条天皇在位中の治世での天変地異

が頻発する模様を叙述して「……アシキ事ノミユキアイツ、御心モトケザリケレバ、サヤウノ御告文ドモ、アリケルニヤ。」(巻四——一八三ページ)と巻三の説話での「震筆ノ宣命メカシキ物」を施線部のように言い換えて引用した。一条天皇は「震筆ノ宣命メカシキ物」すなわちに「御告文」に「三光欲^シレ明^{ナカント}覆^{ヒテ}重雲^ラ」大精暗^シと「日・月・星」の三光を天皇自身に擬し、雲を「臣」の道長に見立てた説話をふたたび組上に乗せた。

巻三の「震筆ノ宣命メカシキ物」をめぐる一条天皇の道長への邪推についての説話を、巻四で「サヤウノ御告文」とあらためて簡約にし、不明の一条天皇の在位する世を支える賢臣の道長を導き出したのである。⁽³⁹⁾

本説話は道長の嫡男として朝野の嘱望をあつめ榮進して「宇治殿」と尊称された頼通の直話を頼通の寵臣で「宇治大納言」と称された源隆国が、施線の末尾で梓で括つたように「書いたものに載っている」と慈円は注記している。これは「宇治拾遺物語」序の「世に宇治大納言物語といふものあり。この大納言は、隆国なり。(中略)大きな双紙に書かれけり。(中略)正本は伝はりて、侍従俊貞といひし人のもとにぞありける。いかになりけるにか。後に、さかしき人々書き入れたるあひだ、物語多くなれり。」と対応しており、『宇治大納言物語』は次々と書き足されていったとあるのは、原皇帝年代記をもとに別帖から付録へと断続的に文章を継ぎ足した『愚管抄』と類同する。『宇治大納言物語』が「小世継」として後代の説話集に引き継がれていることをも勘案したならば、『愚管抄』別帖の序で既存の「世継物語」をふれているのは意味深長である。それは通説によると『宇治拾遺物語』成立は建保年間、三木紀人説に従えば『宇治拾遺物語』の編者は慈円、『宇治拾遺物語』序の「さまざまなり。(中略)書き集めたるなるべし。」との言辞、これらは承元末年から建保年間に慈円圈で『治承物語』が創出されていた事情と呼応するからである。

さて慈円は『夢想記』の「人将」すなわち頼朝を『愚管抄』にそくしてみていくことにしたい。治天の「君」である後白河院を幽閉した清盛は、治承四年(一一八〇)四月には安徳天皇を即位させ、近衛基通が摂政に就けた。『愚管抄』に、

清盛二カクシナサレタル人ニテアルガ(中略)大方攝籙臣始マリテ後コレ程二不中用ナル器量ノ人ハイマダ

ナシ。カクテコノ世ハウセヌル也。

(巻五——二五七ページ)

と近衛基通を酷評し、世は破綻してしまつたと慈円は慨嘆している。一条天皇の在位した世での「臣」の道長と正反対の人物評をした。すでにみた治承四年五月の以仁王の乱・六月の清盛の強行した遷都と十一月の還都さらに十二月南都の寺院焼き討ちの事象を列挙して、王法と仏法とが機能しにくくなつてしまつた治世を「サテカウ程二世ノ中ノ又ナリユク事ハ」と説き起こし、以仁王の令旨を受け取つた頼朝を押し出す。時間順序を逆回転させて治承四年八月よりの源氏勢が蜂起して壇ノ浦海戦で平家を族滅して事象を批評して「今ハ寶劔モムヤクニナリヌル也。(中略)ソノ道理ト法爾ノ時運トノモトヨリヒシトツクリ合セラレテ。流レ下リモエノボル事ニテ侍ナリ。ソレヲ智フカキ人ハコノコトハリノアザヤカナルヲヒシト心ヘツレバ、心智未来智ナドヲエタランヤウニ、スコシモタガハズカネテモ知ラル、也。(中略)サル人モチイラル、世ハヲサマリ……」(巻五——二六五～二六六ページ)としているので、『夢想記』の思念が『愚管抄』で敷衍されたわけである。宝剣喪失は武士將軍の頼朝の代替する時運の到来であると説論し、二重施線部では賢臣の道長のように「フカク見トヲシテ」している人材を登用すると治世が保たれると批評し、「九條右大臣ハ、文治二年三月十二日ニツイニ撰政詔。氏長者ト仰セ下サレニケリ。(中略)「治承三年ノ冬ヨリ、イカナルベシトモ思ヒワカデ、仏神ニ祈リテ攝籙ノ前途ニハ必ズ達スベキ告アリテ、十年ノ後ケフ待ツケツル」トイワレケリ。(中略)又頼朝関東ヨリヤウクニメデタク申ヤクソクシテ、世ノヒシトヲチヒヌ……」(巻五——二七三ページ)となつてゐる。近衛基通に替わつて執政の「臣」となる九条兼実が取り出され、武將頼朝との連携のもとにふたたび治世が平穩になつたと叙述される。王法の再興がなつた「文治」の世から、兼実は「治承」の世では自己の不遇を回顧して、施線にあるように清盛に窒息させられていた往時の冥衆の「夢告」が符合したと述懐するのであるから、これも『夢想記』の「此夢想甚以爲奇異」。已に冥顯共符合了。」と同じ方法である。それでは『愚管抄』の治承四年八月の頼朝挙兵をめぐる文章を次にみると、伊豆國二義朝ガ子頼朝兵衛佐トテアリシハ、世ノ事ヲフカク思テアリケリ。平治ノ乱二十三ニテ兵衛佐トテアリケルヲ、ソノ乱ハ十二月ナリ、正月ニ永曆ト改元アリケル二月九日(中略)伊豆へハ流刑ニ行ヒテケル

ナリ。物ノ始終ハ有^レ興^レ不^レ思^レ議ナリ。其時モカ、ル又打カヘシテ世ノヌシトナルベキ者ナリケレバニヤ。頼盛ヲモフカクタノミタル氣色ニテ有ケルナリケリ。コノ頼朝、コノ宮ノ宣旨ト云物ヲモテ来リケルヲ見テ、
 「サレバヨ、コノ世ノ事ハサ思シモノヲ」トテ心オコリニケリ。又光能卿院ノ御氣色ヲミテ、文覚トテアマリニ高雄ノ事ス、メスゴシテ伊豆ニ流サレタル上人アリキ。ソレシテ云ヤリタル旨モ有ケルトカヤ。但コレハヒガ事ナリ。文覚・上覚・千覚トテグシテアルヒジリ流サレタリケル中、四年同ジ伊豆國ニテ朝夕二頼朝ニ馴タリケル、ソノ文覚、サカシキ事ドモヲ、仰モナケレドモ、上下ノ御ノ内ヲサグリツ、イ、イタリケルナリ。
 (卷五——二五——五二ページ)

前者の二重施線部では現今の治世を流刑地の伊豆から思いめぐらし、後者のそれでは以仁王の令旨を受け取った頼朝は「思っていたとおりだ」と吐露したのであった。この二箇所^{二箇所}の二重施線部から深慮遠謀している頼朝が浮上している。前掲したように挙兵から四年後の壇ノ浦海戦で勝利した頼朝をもとに「ソレヲ智フカキ人ハコノコトハリノアザヤカナルヲヒシト心ヘツレバ、……スコシモタガハズカネテモ知ラル、也」(卷五——二六ページ)と叙述するのであるから、施線部では頼朝に文覚が旧知の院の近臣である光能を通じて院宣を得たと物語に仕組んでいる『治承物語』の内容を史論では簡約にしていると推定できよう。それを破線部では物語の虚構であると慈円は注記したと思われる。やがて頼朝は東国の武士を糾合して上洛させて平家一門に勝利するまでの「内乱合戦」を語る『治承物語』を対置しながら史論を展開したいくわけである。頼朝の率いる源氏の軍勢が東国の安達遠元の女を光能は妻にもち、光能の妹は慈円の高弟である真性の実母であったのだから、東国武士の動向の情報に精通するとともに院の近臣の父の精確な知見が慈円圈にもたらすことは大いにあり得たはずである。慈賢の祖父の頼政の勸説を虚構したことを配意すれば、『治承物語』でも王法の中樞から潤色したのであった。『吾妻鏡』文治二年(一一八六)正月三日条に「文覚が伊豆にあつたとき同心して二品(源頼朝)勸めたところ平家討伐の義兵を挙げられた」との記載があり、『愚管抄』の右文末尾の「(治承)四年同ジ伊豆國ニテ朝夕二頼朝ニ馴タリケル、ソノ文覚、サカシキ事ドモヲ、仰モナケレドモ、上下ノ御ノ内ヲサグリツ、イ、イタリケルナリ……」と

ある一節も真性または東国の出身の宇都宮入道蓮生からの情報であろうと思われる。この史実を、文覚が「夜二マギレテ光能卿ノ許へ行テ(中略)院宣タニモ給ハリタラバ、東八ヶ国ノ家人相催テ京へ打上、君ノ御敵平家ヲバヤスク滅シテ……」(延慶本・二末・八「文学京上シテ院宣申請事」と願つて院宣を貰い、頼朝に届けたと虚構化した。頼朝勝利を跡付け、彼に連帯感をもつ東国武士の去就に焦点をあてるのが『治承物語』の基本構想であつて、盛長の夢と史実より十一年もはやい大將軍の官宣旨の虚構化とは緊密に結合している。⁽⁴⁰⁾

「王位ニ御心カケタ」以仁王が横死した三ヶ月後の治承四年(一一八〇)八月の頼朝挙兵をめぐる顛末を叙述するにあたり、前掲した『愚管抄』の「物ノ始終ハ有_レ興不思議ナリ。」としている寸評のうちの「物ノ始終」の言辞には、『夢想記』の「海底ニ宝劍_ガ没_{シタ}後_ハ其德_ニ於_{テハ}人將_ガ任_ウ歟」の思念が通底している。

おわりに

『平家物語』には永年困窮していた藤原行隆が清盛の推挙によつて廟堂にときめいた話柄を諸本の異同からみると「今年五十一ニナリ給へバ、今更又ワカヤギ給モ哀ナリ。」(延慶本)・「たゞ片時の栄花とぞ見えし。」(寛一本)等と清盛等一門の運命を見越して、須臾にして消える栄達であつたとのくすんだ色調である。が、「左少弁二成返り給フ。今年五十一、若ヤキ給フコソ目出ケレ。」(屋代本・卷三「行隆之沙汰」と結ばれ、しかも「北方、少キ人」とみえ、行隆の子息の行長とも思われる人物が屋代本には添えられている。『十訓抄』(七ノ二七)にも身分の低い者でも取り立てる度量が大きい清盛が語られている。また雅頼に仕えた青侍の夢で「藤原氏ノ大將軍ニ可_レ出ニヤ。」(延慶本)のように承久元年(一二一九)九条家出身の頼経が四代將軍継嗣として下向した事象に及ぼせるのに対して「今ハ伊豆国流人前右兵衛佐源頼朝ニタバラスル也」(屋代本・卷五「物怪之沙汰」と語った。承元末年から建保年間(一二〇〇〜一二一八)頃には形態を整えつつある『治承物語』は、屋代本に残されているのではない

かと思われてくる。『愚管抄』成立以前に創られている『治承物語』では原話や素材が「生のまま」未調整であったのはいうまでもない。『今鏡』が語り終えた「嘉応二年（一一七〇）を引き継いだ新奇な「いくさ物語」である「世継物語」の『治承物語』を対置して、慈円は『愚管抄』を叙述している。嘉応二年より治承四年（一一八〇）に至る世を道理史観で跡づける文章中には抜き差しならない慈円の熱い息吹がこもり、物語化した『治承物語』と実相との息詰りそうな葛藤が看取された。この十年間はまさに澆季末代であり、清盛等の平家一門の驕慢に対する院の近臣の不満が昂じた鹿ヶ谷事件から後白河院の幽閉、慈賢の祖父頼政がくわつた真性の父である以仁王の反乱、以仁王の令旨を受け取った頼朝挙兵、遷都と南都炎上、未曾有の仏法と王法が破綻に瀕していた。兼実は「仏法王法滅尽し了るか。」（『玉葉』治承四年二月二十七日）と慨嘆し、千日入堂の厳しい行を終えた二十五歳の慈円も、その頃は延暦寺の学生と堂衆との闘争が絶頂期にあつただけに、

明暮れば西に心の掛かる哉月日の入るをうちながめつゝ

(二七二)

山深く身を隠してん行末にくやしき事やあらむとすらん

(二八八)

と、西方浄土への思いをつのらせ「生涯無益」と兄の兼実に訴え、時には西山に籠居をした。「治承」の日々の光景が若き潔癖な慈円の臉に焼き付いていた。『治承物語』との書名が付けられる理由の一つであった。

その後、慈円は学僧として天台教学に精通し、王法の体現者である治天の「君」の護持僧になり、天台座主として仏法の牙城の頂点に上りつめた。が、「臣」の甥の良経と兄の兼実とが矢継ぎ早に没したので、今後の我が九条家を懸念して承元元年（一二〇七）十一月に四天王寺別当に就く。四天王寺の『縁起』に「寺塔興隆すれば「官位榮達・子孫繁榮」とある教えに則つて一年程で別当を勤めたのち、辞任するものの別当の後任には高弟の真性を推して家運の再興をあくまで請願しながら、五ヶ年間に亘つて西山に隠棲した。承元三年（一二〇九）三月に良経の女の立子が入内するという九条家の慶事があつた。往年の入内願望の「夢記」をもとに同年六月に「此夢想甚以為「奇異」。已以冥顯共符合了。」との言辞を付して『夢想記』を西山で攔筆する。同時に深慮の末に壇ノ浦の海戦で宝剣喪失にともなつて「武者ノ世」の覇者になつていくのは時運であると刻み、王法に源頼朝に参入するのが道理とする『愚

『管抄』の雛型となる思念が芽生えた。『夢想記』欄筆の四ヶ月後に西山での詠作である「厭離欣求百首」では、

紫の雲まつやとの西の山のかゝれる藤の色そうれしき

(三四〇二)

いまは又わか袖いとふ涙かな露はいつくそ深草の里

(三四二五)

極楽をねかへとはかりおしへてやた西へのみ月はいつらむ

(三四二七)

難波津に今ははるへとなかむれば西にひらけてさくやこの花

(三四五三)

難波江やふかきむかしもあしかきのまちかき物を転法輪所

(三四五五)

たのむそよ靈山界会釈迦大師たれゆゑとてか世に出たまふ

(三四四七)

この歌があり、三四〇二番歌では我が家 pensando 欣快に堪えないと披瀝し、三四二五番歌では『伊勢物語』(百二十三段)の業平の歌「年を経て住みこし里を出ていなはい」と深草野とやなりなむ」を本歌取りにしたのは西山の麓に業平の遺蹟があり、みやび男を志向する雰囲気があったからであり、『治承物語』創出に直接影響をあたえた『今鏡』の作者の寂超と崇徳院の子の元性が西山で『古今集』校合した文事を弁えていたことにもよる。三四二七番歌は前掲した西山での「明暮れは西に心の……」(二七二)の歌と同じ浄土信仰とはいえようが、自得の色あいに清澄な心が浮き出ている。⁴¹⁾三四五三番歌では四天王寺の金堂は極楽土の東門に相当するとの『縁起』の教えから、鳥居の中央にひろがる海に沈む日輪の光に「欣求浄土」を詠じている。三四五五番歌は『縁起』の「昔、釈迦如来転法輪所」をもとに詠み、本百首を結ぶにあつての三四四七番歌では靈験を懇願した。「法のあたを跡まではらふ寺にきて雨にもりやをみぬよしもかな」(二九六五)と荒廃している堂塔整備拡充の所懐の一端を披瀝している。『縁起』での「若修理物尽無其料。百姓擾乱。兵殺綿々……」とあるように堂塔が傷んでも修理しないならば人民が乱を起し、戦乱は絶えることがないとの『縁起』の教えに慈円は目を懲らす。

慈円が四天王寺別当になって堂塔整備等に精励するなかで建保四年(一二一六)正月に聖徳太子の靈告が下り、靈告どおり符合する時運のもとで『愚管抄』を叙述していった。西山隠棲時に我が九条家の立子が入内する事象をもとに『夢想記』を起草して『愚管抄』の雛型をつくつていた。太子の靈告をモチーフにする『愚管抄』成

立事情と西山で創出していく『治承物語』には王法に参入する頼朝に向けての雅頼に青侍の夢・盛長の夢が配され、それが頼朝が平家を破って將軍になっていく経緯が語られる。『夢想記』・『治承物語』・『愚管抄』とは、夢とその符合では共通している。混沌と虚脱の極にある「治承」の世を四天王寺の堂塔の荒廃とともに思い合わせれば、西山隠棲時に治承四年（一一八〇）八月の頼朝挙兵から王法を安寧にしていく趨勢を『縁起』の「兵殺綿々」の言辞をファイルターにして回顧するにちがいない。

『縁起』の「兵殺綿々」の言辞は西山の慈円圈では鍵語となった。

西山で『夢想記』を起草した思念は王法に参入する源頼朝は、養和・寿永に改元されたにもかかわらず、寿永二年（一一八三）五月頃まで「治承」年号を使用した頼朝の行動に慈円は思いを致す。これが書名に「治承」が選ばれる最大の理由である。王法の中核にいた以仁王の令旨を金科玉条にして平家と争った頼朝の行動を見据えて、『今鏡』をはじめとする既存の「世継物語」を止揚しながら、当時としては大胆な「いくさ物語」へと結構していった。『治承物語』は源氏（頼朝）のかげの濃い物語といえよう。創出時の現今では対立する撰閲家の基通の子の家実が「臣」ではあるが、道家の女が順徳天皇の中宮に承元五年（一一二一）となったのであるから九条家の家運に前途に光明を見出せる時運になっている。九条家再興への熱い思いを懷いて『治承物語』を創っていくのである。治承四年（一一八〇）八月の頼朝挙兵から壇ノ浦海戦で平家が族滅する元暦二年（一一八五）に至るまでのまる五年間こそが『治承物語』の枢要にある歴史時間であった。文治二年（一一八六）三月に九条兼実が執政の「臣」に就任した事象をもとに慈円は「頼朝関東ヨリヤウくニメデタク申ヤクソクシテ、世ノヒシトヲチヒヌト世間ノ人モ思テスギケリ。」（『愚管抄』巻六——二七三ページ）と評し、それより以降も「武者ノ世」とはいえ、『治承物語』を企画するまでの四半世紀は干戈を交えることのない治世がつづいている。そのため、物語が対象とした歴史時間とは雲泥の差があつて災禍にみまわれた往時を追懷するゆとりがあった。また西山は繁雑な仕来りのない比叡山延暦寺の別所であつたので、慈円圈が組織されたのである。『愚管抄』を評して「方やウノ戯言」（巻七——三三〇ページ）・「コノ假名ノ戯言」（巻七——三三二ページ）とし、「無益ノ事ドモヲ書グシタリ」

(巻二——二八ページ)と自嘲したのは、正当の真名の学問書等とはなり得ない代物であると『愚管抄』そのものを卑下したのであったが、愉楽の文事として「遊び心」の側面が具有する「戯言」の『治承物語』を取り込んだ釈明でもあったと思われる。

註

〔大尾〕

- 〔1〕 拙稿「慈円の企画本『治承物語』と西山の空間」〔上〕〔中〕〔熊本学園大学 文学・言語学論集〕第一七巻第二号・第一八巻第一号・二〇一〇年二月・二〇一一年六月
- 〔2〕 『日本古典文学大辞典』(岩波書店)の「平家物語」の項。これを執筆した水原一は『延慶本平家物語論考』(加藤中道館・一九七九年)で赤松説を批判した。
- 〔3〕 『平家物語の研究』(法蔵館・一九八〇年)
- 〔4〕 「第二編第二章『愚管抄』依拠の二つの段階——四部合戦状態の位置——」(『平家物語成立過程考』桜楓社・一九八六年)
- 〔5〕 小島明子「第一部第一章『今鏡』〈すべらぎ〉の叙述意識」(『中世宮廷物語文学の研究・歴史との往還』和泉書店・二〇一〇年)
- 〔6〕 拙稿「慈円の企画本『治承物語』と西山の空間」〔上〕〔中〕〔熊本学園大学 文学・言語学論集〕第一七巻第二号・第一八巻第二号・二〇一〇年二月・二〇一一年六月
- 〔7〕 拙著「第五章『愚管抄』の誕生」(『愚管抄の創成と方法』汲古書院・二〇〇四年)
- 〔8〕 註〔7〕と同じ。
- 〔9〕 拙稿「慈鎮和尚夢想記」の方法(『熊本学園大学 文学・言語学論集〕第一三巻第二号・二〇〇六年六月)
- 〔10〕 平泉澄「頼朝と年號」(『史学雑誌』(第二八巻第一〇号・一九二一年一〇月)
- 〔11〕 石井進「第六章 第一節 幕府と国衙の關係の基礎的形成」(『日本中世国家史の研究』岩波書店・一九七〇)二九六―九七ページ
- 〔12〕 早川厚一「後白河院の命を受けた征夷大將軍頼朝により、賊徒平家と義仲は討ち果たされたとする歴史把握の方法は、決して特定の諸本にのみ特徴的なものではなかった。(中略)そのような歴史把握の方法と構想を持つて、少なくとも原態平家物語は、成立していたと考える。」と論じ、東国で挙兵してよりの盛長の夢物語で挙兵した治承四年から三年後の寿永二年に將軍宣旨が下りことを夢合わせとして「遠クハ三年ノ間(中略)此ノ夢ノ告ゲ一ツトシテ相ヒ違フ事有ルベカラズ」(延慶本)を吉夢として物語成立論を開陳している(第三章 平家物語の成立——頼朝と征夷大將軍——)〔『平家物語を読む』和泉書院・二〇〇〇年〕。

- [13] 多賀宗準「参議藤原教長伝」(『論集 中世文化史 上 公家武家篇』法蔵館・一九八五年)
- [14] 山田雄司「崇徳院怨霊の研究」(『思文閣出版・二〇〇一年』一八〇二〇ページ)
- [15] 拙稿「再編された六卷本『治承物語』と九条道家」(『佛教文学』第三六・三七合併号・二〇一二年四月)
- [16] 山本一「第十八章 静賢と俊寛」『慈円の和歌と思想』(和泉書院・一九九九年) 四二二ページ
- [17] 久保田淳「新古今歌人の研究」(東京大学出版会・一九九二年) 六一五ページ
- [18] 『慈円和歌論考』(笠間書院・一九九八年) 一三五ページ
- [19] 佐々木八郎『平家物語評講 上』(明治書院・一九七一年) 一一一ページ・富倉徳次郎『平家物語全注釈 上巻』(角川書店・一九七二年) 一七〇〜七一ページ
- [20] 『延慶本平家物語全注釈(第一本)』(汲古書院・二〇〇五年) 三八〇ページ
- [21] 拙稿「屋代本『平家物語』の建礼門院往生の本質——『徒然草』二百二十六段の「扶持」する慈円から——」(『熊本学園大学 文学・言語学論集』第一六巻第二号・二〇〇九年一月) 慈円の述懐歌をもとに谷山茂は「前大僧正慈円」の項で「その述懐歌を散文にしていけば、また『愚管抄』になつてしまふのである」(『新古今集とその歌』角川書店・一九八三年) と評している。逆に評するならば歌の修辭をもとに史論を展開させることでもあろう。
- [22] 木村真美子「少納言入道信西——僧籍の子息——たち」(『史論』第四五号・一九九二年三月)
- [23] 市古貞次「信西とその子孫」(『日本学士院紀要』第四二巻第三号・一九八八年一〇月)
- [24] 武久堅は「『治承物語』の輪郭」の表題のもとに「現存の『平家物語』から治承年間の主題材のうち早くからひとまとまりの姿で世に出ていた可能性の強い物語群に、「高倉宮物語」と「源三位頼政歌物語」であろう。(中略) 治承年間に端を発する反平家の抗争は清盛の死によつて一切が終局するのではなく、悲惨な展開をみせた寿永、元暦、文治の、いわば平家滅亡への過程が『治承物語』の作者によつて当初から相当なところまでおさえられていたに違いない。」としている(『軍記物の系譜』世界思想社・一九八五年・六四〜六五ページ)。
- [25] 「源頼政——虚構の埋れ木」(『平家物語の虚構と真実』講談社・一九七八年) 一二五〜二六ページ
- [26] 「今鏡」敷島の打聞」注釈(小島孝之『説話の界域』笠間書院・二〇〇六年) 五一三ページ
- [27] 『今鏡全釈 下』(福武書店・一九八三年) 五三〇ページ
- [28] 水原一は二条天皇の后が公能の妹であつたから当天皇崩御は「閑院家の焦慮」となつてはたらし、「閑院家の以仁擁立の意志が動かぬものと判定される。」と論じている(「以仁王の謀叛をめづつて」『延慶本平家物語論考』加藤中道館・一九七九年) 五〇八〜九ページ

- [29] 上横手雅敬『平家物語の虚構と真実』(講談社・一九七三年) 一二五〜二六ページ
- [30] 金沢正大「鎌倉幕府成立期に於ける武蔵国々衙支配をめぐる公文所寄人足立右馬允遠元の史的意義(上)(下)」(『政治経済史学』第一五六号・第一五七号・一九七九年五月・六月)
- [31] 拙著「Ⅲ 第一章 第二節 延慶本にみえる源頼朝」(『愚管抄とその前後』和泉書院・一九九三年)
- [32] 『吾妻鏡』 正治元年八月一日・二〇日
- [33] 註〔3〕の同書「頼政説話について」二三六〜四一ページ
- [34] 註〔31〕の同書「愚管抄と平家物語」二〇三ページ
- [35] 『源頼政』(吉川弘文館・一九九〇) 一一九・一二二ページ
- [36] 錦織周一は「家集『頼政集』を詳細に読み進めて行くとき、以仁王、頼政が挙兵に至った切羽詰まった情念や動機がうかがわれ、そこに一種の訴えやメッセージさえある。」と指摘する(『源三位頼政集全釈』(笠間書院・二〇一〇年・四九二ページ))。
- [37] 『平家物語 上』(新潮日本古典集成) 三五五ページ。頼政の「思やレクラキヤミ路ノ三瀬河瀬タノ白浪ハラヒアヘジヲ」(延慶本・二中・一八)は他に所見のない歌で、「やみち」の使用状況を調査した金光桂子は、慈円の愛用語であり、それ以前に用例がないとした(『有明の別』と文治・建久期和歌・『文学史研究』四六号・二〇〇六年三月)。とすると当該の物語展開はやはり慈円圏で創出していると思われる。
- [38] 註〔28〕の同書五七六ページ
- [39] 註〔31〕の同書「Ⅰ 第二章 第一節 一条朝と藤原道長」
- [40] 註〔12〕の同書で早川は「物語の内実も、頼朝は、伊豆流離中に早くも征夷大將軍を祈念し、盛長の夢合わせにより、その実現が予測され祝されていた」と論じている(二二〇ページ)。松尾葦江は「東国のいくさ語り——頼朝旗揚げ話群——」の論考で「延慶本の頼朝旗揚げ話軍で見れば、ここには荒削りではあっても合戦譚の多様なテーマが揃っており頼朝の成功を跡づけ、彼を頭領としてかつぐ武士たちの連帯感を持つて思うように思われる」(『伝承文学研究』第三七号・一九八九年十二月)とした。
- [41] 当該歌の載る『厭離欣求百首』跋文には「承元三年十月十四日、名月心澄、頓右「禿筆」、詠「廿八首」経「一宿」。翌日十五日之朝、念仏之終、詠「七十二首」全滿「百歌」詠」と慈円は山間の名月に心をすまして、人の世の変化を恬淡とさわやかに詠じた。「治承」の現世への失望から詠作した二十五歳の時とは境地は異なっている。
- [42] 武久堅は『平家物語』を「治承寿永の撰関交替史」と評している。(『第二編 平家物語の成立と九条家周辺』『平家物語発生考』おうふう・一九九九年) 一二三〜六三ページ

〔引用資料の典拠〕

『愚管抄』・は『日本古典文学大系』（岩波書店）、『今鏡』は『講談社学術文庫』、『荒陵寺御手印縁起』・『元暦改元定記』・『兼光卿改元記』・『天王寺旧記』は『統群書類従』所収本、「影供歌合」・「石清水社歌合」は『未刊中世歌合集』（古典文庫）、『宇治拾遺物語』は『新潮日本古典集成』、屋代本『平家物語』は『屋代本高野本対照平家物語』（新典社）、延慶本『平家物語』は『校訂延慶本平家物語』（汲古書院、慈円の歌は『校本拾玉集』、『玉葉』は高橋貞一著『訓読玉葉』（高科書店）、『吾妻鏡』は『全釈吾妻鏡』、『平戸記』・『三長記』は『増補 史料大成』、『千載集』は久保田淳・松野陽一『千載集』（笠間書院）、『拾玉集』は『校本拾玉集』（吉川弘文館）、『続古事談』は『続古事談注解』、『四帖秘決』は『鎌倉遺文』、『源承和歌口伝』は『源承和歌口伝注解』（風間書房）、『源三位頼政集』は『源三位頼政集全釈』（笠間書院）。